

秘



民事訴訟法草案議案意見書

日本學術振興會

序

日本學術振興會第一（法律學、政治學）常置委員會は昭和八年十月其の最初の會合に於て、維新以降我國の立法資料の蒐集に關する小委員會を設置することに決定した、之が即ち第九小委員會である。

右第九小委員會は其の劈頭の事業として、法典調査會に於ける民法法典案の審議の速記録を印刷し、引き續いて刷了したのが左記の通りである。此等の速記録及法案等は原本が一部僅に司法省に存するのみであつて、若し火災等の危険を考へるならば、眞に慄然たらざるを得ないのであるが、今、此の印刷が完了して日本學術振興會、司法省研究室、東京帝國大學法學部圖書室、京都帝國大學法學部圖書室、東北帝國大學附屬圖書館、九州帝國大學法文學部、慶應義塾大學法學部法學研究室圖書館及早稻田大學圖書館に夫々それを保管することが出来るやうになつたのは、誠に結構な次第である。

此等の印刷には、昭和十六年六月から同年十二月まで七箇月の日子を費した。尙、之に付て司法省の當局が直接間接に多大の援助を與へられたことを、茲に深謝する。

昭和十七年三月

元第九小委員長 加藤正治

附記

第九小委員會に屬した委員の氏名は左の通りである。

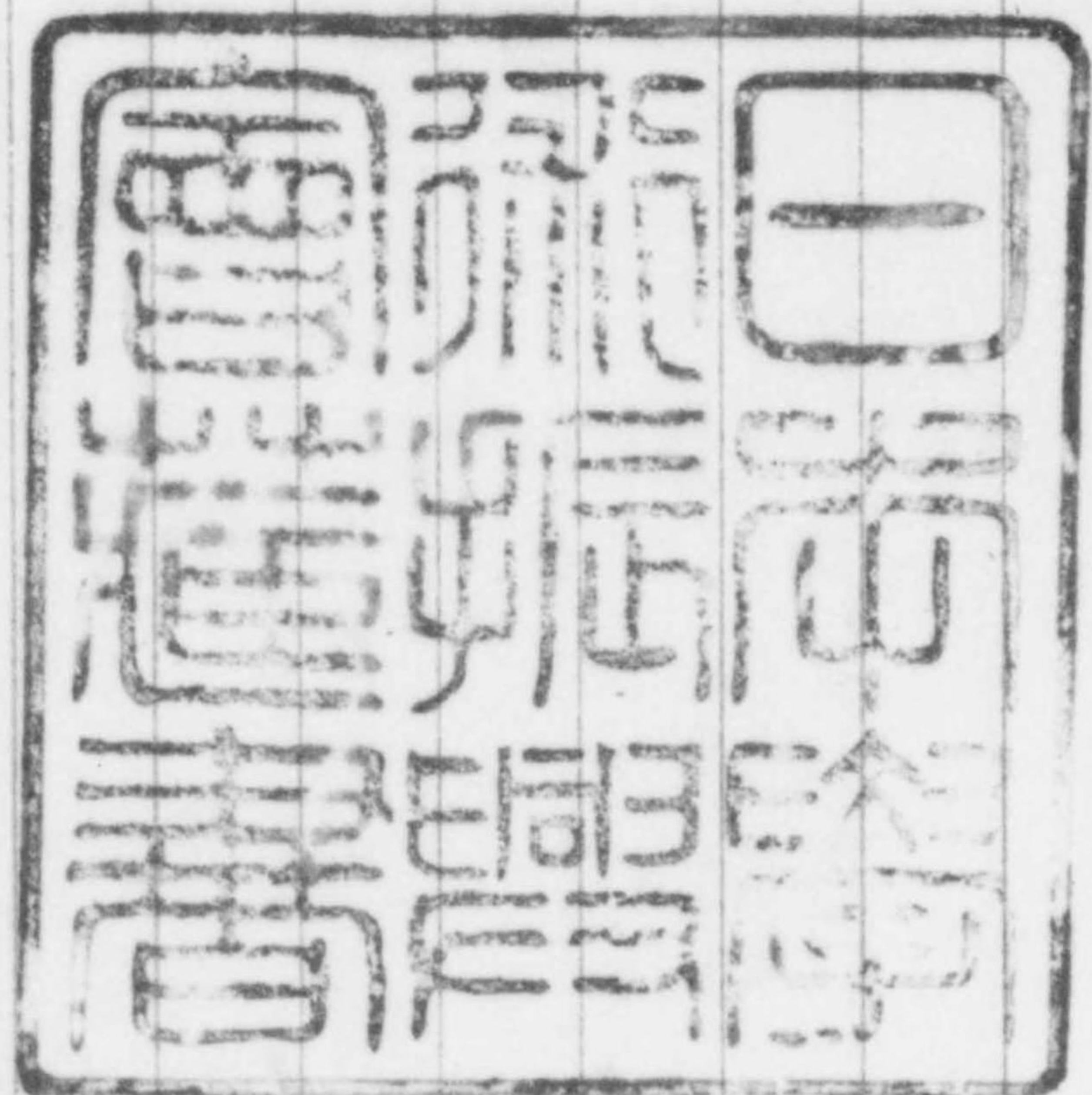
立	末	清	坂	栗	栗	神	川	金	大	織	烏	池	加	岡	尾	米	山	山	三	松	牧	穂	永	長	中	寺	田
	廣	水	野	山	原	戸	島	森	森	田	賀	田	藤	田	佐	澤	田	川	濑	宮	野	積	田	島	尾	中	
作	重		千			寅	信	徳	洪		陽	寅	正	朝	竹	菊	三	端	信	英	重	安	玉	元	耕	太	
太	雄	澄	里	茂	正	郎	郎	郎	太	萬	良	郎	治	太	猛	二	良	夫	三	順	一	遠	吉	毅	吉	彦	
郎														郎													

(以下片假名順)

記

一、商法	一冊	一、法典調査會ノ方針議事規則等	一冊
一、民事訴訟法草案議案意見書	一冊	一、書記執務心得等	一冊
一、民事訴訟法議案	一冊	一、法典調査會特別委員擔任年月日調(甲、乙)	二冊
一、日本訴訟法案(獨逸文) <small>オットー・ルドルフ氏手記</small>	一冊	一、法典調査會總裁副總裁及委員任免一覽表(明治三十一年六月以降ニ在職シタル者)	一冊
一、モツセ氏意見書	一冊	一、聯合會日誌	一冊
一、不動産ニ關スル強制執行議案	一冊	一、撰要永久錄 御觸留	七十九冊(合本)
一、民事訴訟法案第七編第二章以下 調査案(二種)	二冊	一、撰要永久錄 公用留目録	一冊
一、再修正民事訴訟法第七編第二章以下 調査案	一冊	一、撰要永久錄 公用留	四冊(合本)
一、舊民法編纂沿革	一冊	一、撰要永久錄 御用留	八冊(合本)
一、法典調査會規程	一冊		

附
記



日本學術振興會

X3500

M1-16

A.C.

民事訴訟法草案按議案意見書

壹

日本學術振興會

日本學術振興會

來ル十六日（金曜日）會議議案（民事訴訟法
草案第一號）報告委員ヨリ呈出相成候ニ付及
御送付候也

明治廿年十二月十三日

庶務擔任報告委員

XB500
N 1
16

民事訴訟法 按議案第一號

（備考）舊案ハ第一編乃至第三編ニ於テ總則ヲ定メタリ然レトモ
如期總則ヲ數編ニ分チタル類例勘シ且其總則タル事ヲ示サ、
リシ故人チシテ迷ハシムルノ恐レナキニアラス新案ノ如ク總
則ヲ第一編ト定ムルトキハ一目瞭然タルヲ以テ新案ノ編次ニ
從フ又舊案第一條乃至第六條ハ裁判所構成中（第九條第廿條
第三十二條第四十四條第五十六條）ニ規定セラレシ故總テ新
案ニ依リ修正ヲ加フ

第三條（第一項ハ原文ノ儘）

果實、入額利息并ニ損害及ヒ裁判上又ハ裁判

外ノ費用（以下原文ノ儘）

（修正ノ理由）過代金ヲ包含シタル損害ト云フトキハ過代
金ヲ含マサル損害ニ付テハ本條ヲ適用スルヲ得サルモノ、

如ク見ユルチ以テ過代金云々ノ數字チ削リ廣ク之チ損害事
件ニ適用セントス

第五條 (第一項ハ原文ノ儘)

第一内國本位云々ノ一項チ刪除シ隨テ原案第二第三第四第五チ

第一第二第三第四ニ改ム

又原案第四第五中 $\frac{1}{10}$ 倍トアルチ總テ十倍ニ改ム

(修正ノ理由) 本條第一項ニハ爭訟物ノ價額チ定ムルトア

ルニ金額ノ呼高チ揭クルトキハ前後撞著ノ嫌ナキチ免カレ

ス殊ニ金額ノ如キハ裁判所構成法第二十條第一ノ冒頭ニ揭

ケアルチ以テ足レリトセリ

又原案第四第五ノ二十倍ノ額ニ依ルモノトスルトキハ爭訟

物ノ價額相當ニ區裁判所ノ權限ニ屬スルモノ減少スヘシ抑

是等ノ訴件ハ急速ヲ要スルモノ多カルヘキ故可成丈區裁判

所ノ權限ニ屬セシメ簡易ナル手續ヲ以テ速ニ裁判チ與フル
チ相當ト認ム

第九條 (第一項ヨリ第三項マテハ原文ノ通)

移送ヲ言渡シタル判決確定シタルトキハ其爭訟ハ移送セラレタ

ル裁判所ニ屬スルモノト看做ス

(修正ノ理由) 起案者ノ意ハ事物ニ付テノ裁判管轄ハ確定

スルモ地域ニ付テノ裁判管轄ハ確定スル事ナク屬スルノ意

味甚タ輕キ精神ナリト云フチ以テ看做ノ二字チ加フ

第十一條 現役ノ軍人軍屬(以下原文ノ儘)

(修正ノ理由) 單ニ軍人軍屬ト云フトキハ在職ト否トニ論

ナク一般軍人軍屬チ指シタルモノト看做サ、ルチ得ス然レ

トモ本條ハ在職即軍務ニ從事スル者ノミニ適用スルノ精神

ナルカ故現役ノ二字チ加フ

第十二條 治外法權ヲ有スル本邦人ハ本邦ニ於ケル裁判籍ニ付テ

ハ本邦ニ有セシ最後ノ住所ヲ保存ス（以下原文ノ儘）

（修正ノ理由）初メ「テツビヨ一氏」ノ起案ニハ外國ニ任
用セラレタル本邦官吏ノ數字ハナカリシモ前ノ取調委員ニ

於テ獨乙訴訟法第十六條中ノ一部分ヲ取り之レヲ挿入セシ

處今回「モツセ氏」モ之レヲ舊ノ儘据置カレタルモノナリ

然レトモ尙熟考スルニ領事ノ如キハ條約改正ニ依リ果シテ

獨乙領事ノ如ク權利ヲ享クヘキヤ否ハ知ルヘカラス依テ暫

ク右ノ數字ヲ削ル

第十三條 內國ニ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判籍ハ本人ノ內國ニ

於テノ現在地ニ依リ定マル（以下原文ノ儘）

（修正ノ理由）單ニ本人ノ現在地トアルノミニテハ判然ナ

ラス依テ內國ニ於テノ數字ヲ加フ

來ル十七日（土曜日）會議議案（民事訴訟法

草案議案第二號）報告委員ヨリ呈出相成候付

及御送付候也

明治廿年十二月十四日

庶務擔任報告委員

民事訴訟法草案第二號

第十四條 (第一項ハ原文ノ儘)

公又ハ私ノ無形人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラル、事ヲ得ル會社

(以下原文ノ儘)

(修正ノ理由) 府縣市町村社寺等ヲ公又ハ私ト改メシハ民

法草按ニ基キタルモノナリ

第十七條 内國ニ住所云々所在地ノ裁判所ニ之ヲ起ス事ヲ得債權

ニ付テハ債務者ノ住所ヲ以テ其財産ノ所在地トス又債權ニ付キ

物カ擔保ノ責ヲ負ヒタルトキハ其物ノ所在地トス

(修正ノ理由) 債權ノ所在地ト云フトキハ解釋ニ苦ムノ恐

アリ是ヲ以テ本文ノ如ク之ヲ改ム

第二十三條 物上裁判籍(第二十二條)ニ於テハ擔保權

(債權ノ擔保ヲ爲ス從タル權利)ニ付テノ物上ノ訴ニ同一被告

ニ對スル其擔保權ノ主タル債權ノ訴ヲ併ス事ヲ得

（第二項ハ原文ノ儘）

（修正ノ理由）從タル擔保權トアレハ主タル擔保權モアリ
ト解スル者ナキニシモアラヌ故ニ本文ノ如ク修正ヲ加フ

第二十七條 管轄裁判所ノ指定ニ付決定ヲ爲ス裁判所ハ帝國裁判

所構成法第十六條ニ依テ之ヲ定ム

（修正ノ理由）原文ノ第一第二ニ列記セシ文ハ裁判所構成

法第十六條第一項ノ文ト重複ニ涉ルヲ以テ之ヲ改ム

明治廿一年一月六日（金曜日）會議議案（民
事訴訟法草案議案第三號）報告委員ヨリ呈出
相成候付及御送付候也

明治廿年十二月廿七日

庶務擔任報告委員

民事訴訟法草案按議案第三號

第三十二條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ

除斥セラル

第一 (原文ノ儘)

第二 判事又ハ其婦カ原告被告ノ一方若クハ双方又ハ其配偶者ト親屬(刑法第百十四條及ヒ第百十五條ニ定メタル親屬)ナルトキ但親屬ノ原由タル關係既ニ存セサルトキモ亦同シ

第三 (原文ノ儘)

第四 判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スニ當リ判事又ハ仲裁人トシテ參與シタルトキ但此場合ニ於テ判事ハ受命判事又ハ受託判事トシテハ職務ノ執行ヨリ除斥セラル、事ナシ

(修正理由) 本條初項ニ帝國裁判所構成法又ハ其他ノ法律ニ定

ノタル場合ヲ除ク云々トアレトモ如期法文ノ必要ヲ見ス何トナ
レハ構成法中ニ本條ニ類似ノ規定ナシ又起案者カ其他ノ法律ト
指スハ刑法第三十一條ノ第二ヲ云フニアレトモ刑法第三十一條
ノ如キハ本條ノ場合ト大ニ異ナル所アレハナリ是ヲ以テ獨逸訴
訟法第四十一條ニ倣ヒ之ヲ修正ス

同條第二ニ双方又ハ其婦トアレトモ原被告双方中ニ婦人ナシト
云フヘカラス若シ婦人カ原被告ナルトキハ其夫ニ當ルヲ以テ之
ヲ其配偶者ト改ム又但書ニ至リ血屬云々トアレトモ凡ソ血屬ナ
ルモノハ其關係存セサル場合ノ生スヘキ謂ハレナシ且親屬ノ規
定ハ不日民法中ニ定メラルヘキハ勿論刑法ノ條項ヲ適用スルハ
好マシカラス依テ刑法第一百四條云々ニ括弧ヲ加ヘ暫ク之ヲ存
シテ修正ス

第四ニ判事トシテ參與シ云々トアレトモ仲裁人トシテ參與スル

民訴意ノ五

民法草案第一〇〇〇〇
場合一〇〇〇〇アルヲ以テ又ハ仲裁人ノ五字ヲ加フ又囑託
判事ヲ受託判事トスレハ受命判事ト相對スルヲ以テ之ヲ改ム

第三十七條 忌避ノ申請云々職務上ニテ陳述スヘシ

一修正ノ理由一第三十五條ニ陳述トアリテ本條ニ陳辯トアレト
モ別ニ意味ノ異ナルヘキ點ヲ見サル故第三十五條ニ倣ヒ辯ヲ述
ト改ム

明治廿一年一月七日（土曜日）會議議案（民事訴訟法草案按議案第四號）報告委員ヨリ呈出候付及御送付候也

明治廿年十二月廿七日

庶務擔任報告委員

民事訴訟法草案議案第四號

第四十四條 (第一項ハ原文ノ儘第二項ノ末段ハ之ヲ第三項ト爲ス即チ左ノ如シ)

關及^之ノ補充ハ判決ニ接着スル口頭審問ノ終結マテ之ヲ追完スル事ヲ得

(理由) 前段ハ裁判所力爲スヘキ行爲ニ係リ末段ハ訴訟人力爲スヘキ行爲ニ係ル然ルニ原文ニテハ其區別判然ナラサル故之ヲ明瞭ニスル爲メ末段ヲ別項ニナス

第四十五條 (本條中申立トアルモノハ總テ申請ト改メ決定トアルモノハ總テ裁判ト改ム)

(理由) 本條中數ヶ所ニ申請若クハ申立ノ語アルモ其趣意異ナル所ナシ然ラハ種々ノ語ヲ用ユルハ疑惑ヲ生シ易キノミニシテ利益ナキ故一樣ニ申請ト改ム

又同條中ニ一其裁判ハ口頭審問ヲ要セスシテ之ヲ爲ス其決定書
ハ云々トアルモ別ニ字句ヲ二様ニ書分ツヘキ必要ヲ見ス故ニ
總テ決定ヲ裁判ト改ム

第四十六條 第十五條ニ掲ケタル場合ニ於テ訴訟無能力者其現在
地又ハ兵營地ノ裁判所ニ訴ヘラルヘキ場合ニ於テ其法律上ノ代
理人他ノ地ニ住所ヲ有スルトキハ遲滯ノ爲メ危害ナシト雖モ前
條ニ從ヒ代理人ヲ任スル事ヲ得但前條第三項ハ之ヲ適用セス
一修正ノ理由一原文第二項ノ文意ハ甚タ解釋ニ苦ム所アリ依テ
之ヲ第一項ノ但書ニ加ヘ原文ノ精神ヲ明カニス

來ル十三日(金曜日)會議議案(民事訴訟法
草案議案第五號)報國委員ヨリ呈出相成候付
及御送付候也

明治廿一年一月十一日

庶務擔任報告委員

民事訴訟法草案按議案第五號

第五十條 (第一項第二項ハ原文ノ儘)

共同争訟人中ノ或者カ争ヒ(以下原文ノ通り)

(修正理由) 第三項ニハ共同争訟人中ノ唯一人トアリ第四項ニハ共同争訟人中ノ或者トアレトモ其意味異ナル事ナキ故之ヲ一様ニスル爲メ第三項ノ唯一人ヲ或者ト改ム

第五十二條 第一訴訟ハ第一審ニ繫屬スルト上級審ニ繫屬スルト

チ問ハス當時原告、當時被告若クハ參加原告ノ申立ニ因リ又ハ職權チ以テ主參加ニ付權利拘束ノ終ニ至ルマテ之ヲ延擱スル事チ得

(第二項第三項第四項ハ原文ノ儘)

(修正ノ理由) 前條ニハ權利拘束ノ終ニ至ルマテトアリ本條第一項ニハ確定裁判アルマテトアルモ別ニ書キ分ルヘキ必要チ見

サ
ル
ノ
ミ
ナ
ラ
ス
反
テ
疑
テ
生
ス
ル
恐
レ
ア
ル
ヲ
以
テ
前
條
ニ
倣
ヒ
權
利
拘
束
ノ
終
ニ
至
ル
マ
テ
ト
改
ム

第五十五條 從參加人ハ其争訟ヨリ更ニ退キタルトキト雖トモ其補助シタル原告若クハ被告トノ關係ニ於テハ争訟ニ付キ爲シタル確定裁判カ不當ナリシトノ主張ヲ爲ス事ヲ得ス
從參加人ハ其附隨ノ時ノ争訟ノ程度ニ因リ又ハ主タル原告若クハ被告ノ所爲ニ因リ攻撃及ヒ防禦

(以下原文ノ通)

(修正ノ理由) 附隨ヲ許スヘカラストシテ卻ケラレタルモノニアラサルノ數字ハ之ヲ加ヘサルヲ得サルノ理由ヲ見サル故舊案第七十三條及獨逸訴訟法第六十五條トニ倣ヒ此數字ヲ削リ又以下ハ事柄相離ル、ヲ以テ又ノ一字ヲ削リ之ヲ二項ト爲ス

來ル二十日(金曜日)會議議案(民事訴訟法草案議案第六號)報告委員ヨリ呈出相成候付
及御送付候也

明治廿一年一月十八日

庶務擔任報告委員

第六十三條（第一項ハ原文ノ儘）

私證書ハ相手方ノ求ニ因リ公證人又ハ管轄官吏ノ認證ヲ受クヘシ○

口頭委任ハ口頭審問ノ期日ニ於テ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ前ニ於テ之ヲ陳述シテ調書ニ記載セラレタルトキハ書面委任ト同一ナリトス

（修正ノ理由）第二項ノ原文ニハ職印ヲ備ル國又ハ町村ノ官吏トアレトモ甚タ漠然シテ官吏ノ範圍詳カラス蓋シ認證ヲ爲スヘキモノハ公證人又ハ郡區長若クハ戸長等ニ限ルヘシ是ヲ以テ公證人又ハ管轄官吏云々ト修正ス尤裁判所ニ於テ後見人等ヲ支配スルニ至レハ此管轄官吏中ニ裁判所ノ官吏モ包含スルノ精神ナリ

第三項ノ末段ニ且○調書ニ記載スルト○キハトアル文詞ハ委任ヲ爲ス者カ自ラ調書ニ記載スル如ク解スルノ嫌アルヲ以テ本文ノ通り之ヲ改ム

第六十四條 訴訟委任（第六十三條）ハ反訴、參加、故障、抑置若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル訴訟上ノ行為ヲ合セ争訟ニ關スル總テノ訴訟上ノ行為（以下原文ノ儘）

（修正ノ理由）訴訟行為ト云ヘハ訴訟不行爲ト云フトキハ争訟ヲナサ、ルモノト見ルノ嫌アルカ故上ノ二字ヲ加フ

第六十七條 訴訟代理人カ争訟ニ於テ委任ノ範圍内ニテ爲シタル訴訟上ノ行為及ヒ不行爲ハ原告又ハ被告ニ對シテハ其自己ノ行為又ハ不行爲タルト同一ノ結果ヲナス（第二項ハ原文ノ儘）
（修正ノ理由）本條中訴訟上ノ行為ト改メタルハ前條修正ノ理由ニ同シ又其末段ヲ同一ノ結果ヲナスト改メタルハ同一ノ效力

ト看做スノ意ヲ明カニスルマテナリ

第六十八條 （前段ハ原文ノ儘ニシテ然レトモノ三字ヲ削リ辯護

士云々ヲ二項トナシ左ノ如ク修正ヲ加フ）

辯護士ニ依レル代理ヲ要スルトキニ限り前項委任ノ消滅ハ他ノ辯護士ノ任役ヲ届出ツルニ至ルマテ相手方ニ對シ法律上ノ效力ナシ

（其次項中及ヒトアルヲ且ニ改ム

（末項ハ原文ノ儘）

（理由）辯護士ニ依レル云々ヲ第二項ト爲シタルハ解シ易キヲ慮リタルマテナリ又及ヒチ且ト改メタルハ上ノ差出シトアルヲ受クルニハ且トスルヲ相當ト思考スレハナリ

第六十九條 （第一項原文ノ儘）

裁判所ハ委任又ハ適式ノ委任ナク代理人トシテ出頭スル者ニ場

合ノ情況ニ隨ヒ費用及ヒ損害ニ付テノ保證ヲ立テシノ又ハ保證
ヲ立テシノスシテ假リニ訴訟ヲ爲スヲ許ス事ヲ得（以下原文ノ
儘）

（修正ノ理由）殊ニ場合ノ情況云々ヲ入レ文章ニスルトキハ或
ハ誤解スルモノナキヲ保シカタシ依テ本文ノ如ク改ム

第七十條（冒頭ノ辯護士ニ依レル代理ヲ要セサルトキニ限りノ十

八字ヲ削リ以下原文ノ儘）

（修正ノ理由）原文ノ精神ハ辯護士ニ依レル代理ヲ要スル場合
ニ於テハ輔佐人ヲ出頭セシムルヲ許サ、ルノ謂ナリ然レトモ辯
護士ニ依レル代理ヲ要スル場合ニ限り豈輔佐人ヲ禁スルノ道理
アラシヤ是ヲ以テ冒頭ノ數字ヲ削ル

來十三日（金曜日）會議議案（民事訴訟法
草案議案第六號更正）報告委員も呈出相成
候付及御送付候也

明治廿一年四月十日

庶務擔任報告委員

民事訴訟法草案議案第六號更正

第六十二條 原告被告ハ自ラ争訟ヲ爲シ又ハ各訴訟能力者ヲ以テ訴訟代人トシテ之ヲ爲ス事ヲ得

（修正ノ理由）總テ民事訴訟ハ如何ナル程度ニアルヲ問ハス自ラ之ヲ爲シ又ハ之ヲ辯護士ニ依頼スルモ其本人ノ自由ニ任スヘキ事ニ議定相成タル所ノ主義ニ基キ辯護士ニ依レル代理云々ヲ削除シタリ又訴訟代理人ノ理ノ一字ヲ削リシハ翻譯局ノ更正ニ係ル

第六十三條 訴訟ヲ爲ス爲メノ委任ハ裁判所ノ記録ニ供フヘキ書面委任ヲ以テ之ヲ證スヘシ

私證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證スヘシ其認證ハ公證人之ヲ爲シ又相當官吏之ヲ爲ス事ヲ得
口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ口頭委

任ヲ爲シ其陳述ヲ調書ニ記載セラレタル時ハ書面委任ト同一ナリトス

（修正ノ理由）第一項ノ文字ハ翻譯局ト協議モノナリ

第二項原文ニ職印ヲ備ル國又ハ町村ノ官吏トアルモノハ甚々漠然ナリ抑認證ヲ爲スヘキモノハ公證人又ハ區戸長等ノ如キ直接ニ人民ヲ支配スル官吏ニ限ルヘシ是ヲ以テ本文ノ如ク修正ス尤裁判所ニ於テ後見人等ヲ支配スルニ至レハ其裁判所ノ官吏ハ相當官吏中ニ包含スルノ精神ナリ

第六十四條 訴訟委任（第六十三條）ハ反訴、主條加、故障、抑置若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル訴訟行爲ヲ併セ争訟ニ關スル總テノ訴訟行爲、名代人ノ任設及ヒ相手方ヨリ辨償スル費用ノ領收ヲ爲スノ權ヲ授與ス

訴訟代人ハ特別ノ委任ヲ受タルニアラサレハ控訴若クハ上告ヲ爲

シ再審ヲ求メ和解ニ因テ争訟ヲ排解シ争訟物ヲ拋棄シ又ハ相手方ヨリ主張シタル請求ヲ認諾スルノ權ヲ授與セラレス

（修正ノ理由）第一項中參加ヲ主條加ト爲シタルハ行爲中ノ重モナルモノヲ掲ゲシモノナリ又抗告ノ如キハ總テノ訴訟行爲トアル文詞中ニ包含スルノ精神ナリ

並ニ上級審云々ノ數字ヲ削リタルハ第六十二條ヲ修正シタル結果ナリ

第二項中ニ控訴若クハ上告ヲ爲シ云々ヲ加ヘタルハ第一項ノ法律上ノ委任權ノ範圍ヲ縮メシモノナリ若シ是等ノ權限ヲ法律上委任シタルモノトスル時ハ本人ニ於テ上訴ヲ爲スノ意ナキモ訴訟代人カ妄リニ控訴上告ヲ爲スノ恐レアリ然レ共即時抗告ノ如キハ訴訟進行中ノ手續ニ係ルヲ以テ第一項中ニ包含セシモノト爲シタル所以ナリ

第六十五條 訴訟委任ノ法律上範圍（第六十四條第一項）ノ制限ハ相手方ニ對シ法律上ノ效力ナシ

辯護士ニ依レル代理ヲ除クノ外委任ハ各個ノ訴訟行爲ニ付キ之ヲ與フル事ヲ得

（修正ノ理由）第一項ハ趣意ヲ明カニシタルマテナリ第二項中要セサル時ニ限リテ除クノ外ト改メタル時ハ第六十二條ヲ修正セシ結果ナリ

第六十六條 （第一項ハ原文ノ儘第二項ノ括弧中第六十條第二十二條トアルヲ削ル）

（修正ノ理由）商法草案中第四十五條ハ本條ニ觸レル所アレ共第六十條第二十二條ハ本條ニ關係スルモノニアラサルヲ以テナリ

第六十八條 （第一項中届出ツルニ至ルノ七字ヲ削リ通知スルノ四

字ヲ加ヘ然レ共以下削除シ第二項ハ左ノ如ク改ム）其通知書ハ原告又ハ被告ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達スヘシ

（第三項ハ原文ノ儘）

（修正ノ理由）第一項中届出云々ヲ通知ト改メタルハ相手方へ通知セサル中ハ效力アリト看做サレハ中断ノ節ニ至リ差支アルヲ以テナリ然レ共以下ヲ削リタルハ第六十二條ヲ修正シタル結果ナリ

第六十九條 （第一項ハ原文ノ儘）

裁判所ハ委任又ハ適式ノ委任ナク代人トシテ出頭スル者ニ場合ノ情況ニ隨ヒ費用及ヒ損害ニ付テノ保證ヲ立テシメ又ハ保證ヲ立テシメスシテ假ニ訴訟ヲ爲スヲ許ス事ヲ得

（以下原文ノ儘）

（修正ノ理由）趣意ヲ明カニシタルマテナリ

第七十條 （第一項冒頭ノ辨護士云々要セザル時ニ限リノ十八字ヲ
ヲ削リ以下原文ノ儘）

（修正ノ理由）第六十二條ヲ修正シタル結果ナリ

第七十一條 （本條中第二項ヲ削リ餘ハ原文ノ儘）

（理由）第六十二條ヲ修正シタル結果ナリ

第七十三條 （本條中起訴前ノ三字ヲ削ル）

（理由）原文中ニ其作爲ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメ云々トアレハ

起訴前ニ係ルモノナル事自ラ明カナル故起訴前ノ三字ハ之ヲ必

要トセス

來十四日（土曜日）會議議按（民事訴訟法草
案議案第七號）報告委員ヨリ呈出相成候付及
御送付候也

明治廿一年四月十一日

庶務擔任報告委員

民事訴訟法草案議案第七號

第七十七條 (第一項冒頭ノ之ニ反シノ四字ヲ削リ以下原文ノ儘)

原告又ハ被告前審ニ於テ主張スル事ヲ得ヘカリシ所ノ新タナル事實又ハ攻撃若クハ防禦ノ方法ヲ提出スルニ因リ(以下原文ノ儘)

(修正ノ理由) 第一項ノ之ニ反シノ四字ハ必要ヲ見サル故之ヲ削リタリ

第二項中ニ新タナル提供ニ因リトアルノミニテハ何ヲ提供スルノ意カ明瞭ナラス依テ事實又ハ云々ノ數字ヲ加フ

第七十九條 (本條中參加カ著シクトアルヲ利害ノ關係カ著シクト改メ其參加ノ情況ニトアルヲ其利害ノ關係ニト改メ爭訟人ノ一人トアルヲ爭訟人中ノ或ル者カト改ム又末段責ニ任セスノ上ニ其ノ一字ヲ加フ)

(修正ノ理由) 本條ノ精神ヲ明カニセシマテナリ尤爭訟人ノ一人

三州裁判所
争訟人中ノ或ル者カト改メタルハ第五十條第三項ノ例ニ倣ヒタルモノナリ

第八十二條 裁判所書記法律上代人、辯護士并其他ノ代人及ヒ執達吏ノ過懲又ハ懈怠ニ因リ避ケ得ヘキ費用ヲ生セシメタルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其費用ノ辨償ヲ課スル決定ヲ爲ス事ヲ得其決定前ニ於テ當事者ニ口頭又ハ書面ニテ陳辯ヲ爲ス機會ヲ與フヘシ其裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲ス事ヲ得其決定ニ對シテハ即時ノ抗告ヲ爲ス事ヲ得

(修正ノ理由) 本條ノ括弧中ニ過懲又ハ懈怠トアレトモ之ヲ本文ニスレハ却テ明瞭ナル故括弧ヲ省ク又末段ニ裁判ヲ受ケタル者ハ云々抗告ヲ爲ス事ヲ得トアレトモ若シ如此法文ヲ存スルトキハ裁判ヲ受ケサルモノモ時トシテハ上訴ヲ爲スノ途アルカト疑フノ恐れアリ且抗告ヲ許ス場合毎ニ七日ノ期間云々ノ文詞ヲ加フルハ甚

タ煩ハシキ故即時ノ抗告ト改メ抗告ノ簡ニ至リ即時抗告ハ七日間ト云ノ法文ヲ設ケント欲ス

其他ノ修正ハ文意ヲ明カニセシマテナリ

第八十三條 (第一項第二項ハ原文ノ儘)

其申請ハ裁判所書記ニ口述シテ調書ヲ作ラシムル事ヲ得

(第四項ハ原文ノ儘)

(修正ノ理由) 第三項ノ原文ニテハ調書ヲ作ルヤ否ノ疑ナキヲ免レス依テ本文ノ如ク修正ヲ加フ

第八十四條 (第一項第二項第三項ハ原文ノ儘)

決定ニ對シテハ即時ノ抗告ヲ爲ス事ヲ得

(修正ノ理由) 第八十二條ヲ修正シタル例ニ倣フ

新第八十六條 訴訟上ノ保證ハ原告被告別段ノ合意ヲ爲サ、ル限りハ裁判所ノ意見ヲ以テ抵保ニ充分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ預

ケテ之ヲ爲スモノトス

(理由) 本條ハ舊案第百十八條ニ規定シタル所ニシテ入獨訴訟法第百一條ト一般ナリ然ルニモツセ氏ハ之ヲ置カサレトモ必要ノ條項ト認ムルヲ以テ新タニ之ヲ設ク

第八十七條 (第一項ハ原文ノ體第二項第一ヲ左ノ如ク改ム)

第一 國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ立ツルノ義務ナキ時

(其餘ハ原文ノ體)

(修正ノ理由) 新タニ一條ヲ設ケシ故第八十六條ヲ第八十七條ト改ム以下之ニ倣フ又第一號中互相云々ヲ本邦人云々と修正シタルハ場合ヲ明瞭ニシタルモノナリ

新第八十八條 裁判所ハ保證ヲ立ツヘキ數額及ヒ期間ヲ確定スヘシ其數額ヲ確定スルニハ被告カ訴ヲ受ケタルカ爲メ各審級ニ於テ支

スヘキ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲ス可シ
争訟中ニ保證ノ不足ヲ生シ且被告カ追増保證ヲ立ツル事ヲ求ムル時ハ前項ト同一ノ手續ニ依ル但争ナキ請求ノ部分カ抵保ニ充分ナル時ハ此限ニ在ラス

(修正ノ理由) 本條第一項ハ元來舊案ニ於テ中間判決ヲ採用セラレサリシ故原文ノ如キ法文ヲ置キタルモノナラン然レ共此度中間判決ヲ設クル精神ナルヲ以テ本文ノ如ク修正ス第二項第三項ハ趣意ヲ明カニセシマテナリ

第九十條 何人タリ共自己及ヒ其家族ニ必要ナル生計ヲ害スルニアラサレハ訴訟費用ヲ出タス事能ハサル者ハ其目的トスル權利ノ伸張又ハ權利ノ防禦力輕卒ナリト見ヘス又ハ見込ナキト見ヘサル時ハ受救權ノ付與ヲ請求スル事ヲ得

(修正ノ理由) 原文中ニ當サニ始マルヘク又ハ既ニ拘束セラレ

タルノ數字及ヒ明カニノ三字ハ必要ヲ見サルノミナラス反テ疑
ハシキ文詞ナル故之ヲ削リタリ

第九十一條 外國人ハ其屬スル國ノ法律又ハ國際條約ニ依リ本邦人
カ同一ノ場合ニ於テ受救權ヲ請求スル事ヲ得ル時ニ限り之ヲ請求
スル事ヲ得

(修正ノ理由) 第八十七條ノ第一ヲ修正シタル例ニ倣フ

來二十日(金曜日)會議議案(民事訴訟法
草案第八號)報告委員も呈出相成候付御送
付におよひ候也

明治廿一年四月十七日

庶務擔任報告委員

原第十一

民事訴訟法草案議案第八號

第九十二條 受救權付與ノ申請ハ爭訟ノ關係ヲ表明シ且舉證方法ヲ明示シテ其付與ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出スヘシ其申請ハ裁判所書記ニ口述シテ其調書ヲ作ラシムル事ヲ得

（第二項中身分又ハ職業トアル又ハノ二字ヲ削リ又管轄各地官廳トアル管轄ノ二字ヲ削除ス以下原文ノ儘）

（修正ノ理由）第一項ヲ修正シタルハ第八十三條第三項ヲ修正シタル例ニ倣フ第二項中又ハノ二字ヲ削リタルハ他ノ法律規則ノ先例ニ從ヒタリ管轄ノ二字ハ上ニ管轄權ヲ有スルトアル故必要ナラサルヲ以テナリ

原第十五

第九十六條 受救權ノ付與ニ因リ原告又ハ被告ハ左ノ諸件ヲ得

第一 裁判費用（國庫ニ生シタル立替金ヲ含ム）ヲ濟清スル事ノ
仮ニ免除

第二 (原文ノ儘)

第三 送達及ヒ執行行爲ヲ一時無報酬ニテ爲サシムル爲メ執達吏
ヲ自己ニ添附セシメラルヽノ權利

受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ受救權ノ付與セラレタル原告
又ハ被告ノ爲メ無報酬ニテ辯護士ノ添附ヲ命スル事ヲ得

(修正ノ理由) 第一ニ國庫ニ生シ云々トアレハ立替金ハ裁判費用
外ノモノ、如ク解スルノ嫌アルヲ以テ國庫ニ生シ云々ノ數字ヲ
括弧中ニ入ル

第三ニ執行行爲トアルマテニテハ送達ヲ包含セサルモノト誤解
スルノ恐レアル故送達及ヒノ四字ヲ加フ又辯護士以下ヲ削リタ
ルハ第六十二條ヲ修正シタル結果ナリ

末項ノ修正モ亦第六十二條ヲ修正シタル結果ナリ

第九十八條 (本條中裁判費用及ヒ立替金トアル「及ヒ立替金」ノ

民訴意ノ七五

五字ヲ削リ取立ニ關シ存スルトアル「シ存」ノ二字ヲ削リ其確定
裁判トアル「其」ノ一字ヲ削ル

(修正ノ理由) 「及ヒ立替金」ノ五字ヲ削リタルハ第九十六條第
一號ヲ修正シタルニ基キタルモノナリ其餘ハ疑ハシキ文字ヲ省
キタルマテナリ

第九十九條 受救權ヲ許サレタル原告又ハ被告ハ自己及ヒ其家族ニ
必要アル生計ヲ害スル事無クシテ濟清ヲ假リニ免除セラレタル數
額(第九十六條第一號)ノ追拂ヲ爲シ得ルニ至ル時ハ直ニ之ヲ追
拂スルノ義務アリ

(修正ノ理由) 本條ハ文意明カナラサル故聊カ其精神ヲ明カニス

第一百條 裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後受救權ノ付與ノ申請、受
救權ノ剝奪及ヒ數額(第九十六條第一號)追拂ノ義務ニ付キ決定
ス

裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲ス事ヲ得

（修正ノ理由）第一項中檢事ヲ審訊シハ甚タ種當ナラサル故「ノ
意見ヲ聽キ」ト改ム并ニ辯護士云々ヲ削リタルハ第六十二條ヲ
修正シタル結果ナリ第二項ノ修正ハ先例ニ倣フ

第一百一條（第一項ハ原文ノ儘第二項ハ削除第三項中「又ハ辯護士
ノ添附ヲ否ミ」ノ數字ヲ削リ抗告スル事ヲ得トアルヲ抗告ヲ爲ス
事ヲ得ト改ム

（修正ノ理由）本條第二項ハ前條ヲ修正シタル結果ニテ之ヲ削ル
第三項中又ハ云々ヲ削リタルハ第六十二條ヲ修正シタル結果ナ
リ其餘ハ先例ニ倣フタリ

備考

第三章第一節ハ「モツセ」氏ヨリ起案ヲ差出サヌ又是マテ「モ
ツセ」氏ノ起案ニ係ル條項ニ基ク時ハ強ク旧草案ノミニ依ル事

ヲ得ヌ是ヲ以テ報告委員ニ於テ旧草案ト獨逸訴訟法トヲ彼是辦
酌シ起案シタルモノナリ故ニ此節ハ逐條全文ヲ掲ケ御取調ノ便
ニ供ヌ尤其説明ノ如キハ本會ニ於テ口頭ヲ以テ演述スヘシ

第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面

第二百二條 判決ヲ爲ス裁判所ニ於ケル争訟ニ付テノ原告被告ノ辯論ハ口頭ナク但此法律ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲ス事ヲ定メタル時ハ此限ニ在ラス

法廷外ニ於ケル訴訟指揮上ノ命令ハ裁判長^所之ヲ爲ス

第二百三條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第二百四條 準備書面ニハ左ノ諸件ヲ掲クヘシ

第一 原告被告及ヒ其法律上代人ノ氏名、身分、職業、住所及ヒ原告被告タルノ資格、裁判所及ヒ争訟物ノ表示、附屬書類ノ數

第二 原告又ハ被告カ法廷ニ於テ爲サント欲スル申立

第三 申立ノ原由タル事實上關係ノ明示

第四 相手方ノ事實上主張ニ付テノ陳述

旧第三百二十九條

旧第四百一十條

旧第五百一十條

第五 原告又ハ被告カ事實上主張ノ證明又ハ攻撃ノ爲メ用ヒント
スル舉證方法及ヒ相手方ノ申出テタル舉證方法ニ付テノ陳述

第六 原告被告又ハ訴訟代人ノ署名及ヒ捺印

第七 年月日

第一百五條 準備書面ニハ訴訟ノ資格ニ屬スル證書ノ原本、正本又ハ
謄本ト其他總テ原告被告ノ手中ニ存スルモノニシテ書面中ニ申立
ノ原由トシテ引用シタル證書ノ謄本ヲ添フル事ヲ要ス

證書ノ一部分ノミヲ要用トスル時ハ其冒頭、事件ニ屬スル部分、終
尾、日附、署名及ヒ印影ヲ載スル拔書ヲ添フルヲ以テ足ル

證書カ既ニ相手方ニ知レタル時又ハ大部ナル時ハ其證書ヲ明細ニ表
示シ且相手方ニ之ヲ展開セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル
第六條 原告被告ハ準備書面及ヒ其付屬書類並ヒ相手方ニ付與ス
ル爲メノ必要ナル謄本ヲ裁判所書記局ニ差出スヘシ

民訴意ノ七八

若シ相手方ニ付與スル爲メノ必要ナル謄本ヲ差出サ、ル時ハ裁判
所書記ハ其者ノ費用ヲ以テ之ヲ作ラシムヘシ

來二十一日（土曜日）會議議案（民事訴訟法
草案按議案第九號）報告委員ヨリ呈出相成候付
及御送付候也

明治廿一年四月十八日

庶務擔任報告委員

舊第四百四十七

第一百七條

裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮ス

裁判長ハ發言ヲ許ス又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スル事ヲ得

裁判長ハ事件カ充分ニ説明セラレ且辯論カ間斷ナク終了セララル

事ニ注意ス又必要ノ場合ニ於テハ直ニ辯論繼續ノ期日ヲ定ム

裁判長ハ裁判所ノ見込ニ隨ヒ事件カ充分ニ説明セラレタル時ハ口

頭辯論ヲ閉チ并ニ裁判所ノ判決及ヒ決定ヲ言渡ス

舊第二百三十一
獨第二百二十八

第一百八條

口頭辯論ハ原告被告カ其申立ヲ爲ス事ニ因リ始マル

原告被告ノ演述ハ事實及ヒ法律上ノ點ニ於ケル爭訟關係ヲ包括ス
ル事ヲ要ス

口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ引用スル事ハ之ヲ許サス文字上ノ趣旨ヲ
要用トスル書類又ハ其一部分ニ限り之ヲ朗讀スル事ヲ得

舊第二百三十二
獨第二百二十九

第一百九條

原告被告各万ハ相手万ノ主張シタル事實ニ付キ陳述ヲ爲

ス事ヲ要ス明カニ争ハレサル事實ハ原告又ハ被告ノ其他ノ陳述ヨ
リ之ヲ争ハント欲スルノ意思カ顯レサル時ハ自認シタルモノト看
做サル

不知ノ陳述ハ原告又ハ被告ノ自己ノ行爲ニモアラス又其自己ノ實
驗シタルモノニモアラサル事實ニ限り之ヲ許ス其許サレタル場合
ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ争ハレタルモノト看做ス

第一百十條 裁判長ハ職權上調査スヘキ點ニ關シ相手方ヨリ起サ
ル疑ノ存スル時ハ其疑ニ付キ注意ヲ爲ス事ヲ得

裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ解明シ主張シタル事實ノ不
充分ナル説明ヲ補充シ舉證方法ヲ申出テ及ヒ總テ事件ノ關係ヲ定
ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サシム

裁判長ハ陪席判事カ問ヲ發スル事ヲ求ムル時ハ之ヲ許スヘシ
原告被告ハ裁判長ノ許可ヲ得テ相手方ニ問ヲ爲ス事ヲ得

若シ其問カ答ヘラレス又ハ判然答ヘラレサル時ハ相手方ノ利益ト
爲ルヘキ方法ニ答ヘラレタリト看做ス事ヲ得

第一百十一條 事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若クハ陪席
判事ヨリ發シタル問カ辯論ニ參カル者ヨリ不適法ナリトシテ異議
ヲ述ヘラレタル時ハ裁判所ハ其異議ニ付直ニ裁判ス

第一百十二條 裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告又ハ被
告ノ自身ノ出頭ヲ命スル事ヲ得

第一百十三條 裁判所ハ原告又ハ被告カ引用シタル證書ニシテ其手中
ニ存スルモノヲ提出スヘキ事ヲ命スル事ヲ得
裁判所ハ外國語ヲ以テ作りタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添フヘキ事
ヲ命スル事ヲ得

第一百十四條 裁判所ハ原告被告ノ所持スル記録ニシテ事件ノ辯論及
ヒ裁判ニ關スルモノヲ提出スヘキ事ヲ命スル事ヲ得

新
第三百三十五

舊第二百四十二
獨第三百三十六

舊第二百四十三
獨第三百三十七

舊第二百四十四
獨第三百三十八

舊第二百四十五
獨第三百三十九

第一百十五條 裁判所ハ臨檢及ヒ鑑定人ノ鑑定ヲ命スル事ヲ得

其手續ハ申立ニ因リ命シタル臨檢及ヒ鑑定人ノ鑑定ニ付テノ成規ニ依ル

第一百十六條 裁判所ハ一個ノ訴ニ於テ起サレタル數個ノ請求又ハ訴及ヒ反訴ニ付キ其辯論ヲ分離シテ爲スヘキ事ヲ命スル事ヲ得

第一百十七條 同一ノ請求ニ關スル數個ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタル時ハ裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一ニ制限スヘキ事ヲ命スル事ヲ得

第一百十八條 裁判所ハ同一ノ人又ハ異別ノ人ノ數個ノ訴訟ニシテ其裁判所ニ繫屬スルモノヲ互ニ併合スヘキ事ヲ命スル事ヲ得但其訴訟ノ目的タル請求力元來一個ノ訴ニ於テ主張セラレ得ヘキ時ニ限ル

第一百十九條 裁判所ハ争訟ノ全部又ハ一部ノ裁判力他ノ繫屬スル争

民訴法ノ二四

舊第二百四十六
獨第三百四十

舊第二百四十七
獨第三百四十一

訟ニ於テ定マルヘキ權利關係ノ成立又ハ不成立ニ繫ル時ハ他ノ争訟ノ完結スルニ至ルマテ辯論ヲ中止スヘキ事ヲ命スル事ヲ得

第一百二十條 裁判所ハ民事争訟ヲ爲スニ由テ罰セラルヘキ行爲ヲ行フタルノ嫌疑生スル時ハ刑事訴訟手續ノ終ニ至ルマテ辯論ヲ中止スル事ヲ要ス但其罰セラルヘキ行爲ノ探知力争訟ノ裁判ニ影響ヲ及ホス時ニ限ル

第一百廿一條 裁判所ハ前條ノ場合ヲ除クノ外分離併合又ハ中止ニ關シ發シタル命ヲ取消ス事ヲ得

Blank lined area for text on the right page.

來二十八日(土曜日)會議議案(民事訴訟法草案議案第十號)報告委員より呈出相成候付及御送付候也

明治廿一年四月廿五日

庶務擔任報告委員

民事訴訟法草案議案第十號

民事訴訟ノ二五

舊第二百四十九條

第二百二十二條 裁判所ハ閉チラレタル辯論ノ再開ヲ命スル事ヲ得

舊第二百六十一條
獨構成法
第一百八十七條

第二百二十三條 裁判所ハ辯論ニ參カル者日本語ニ通セサル時ハ通事ヲ立會ハシム但帝國裁判所構成法第三百三十一條ノ場合ハ此限ニ在ラス

舊第二百六十一條
獨構成法
第一百八十八條

第二百二十四條 裁判所ハ辯論ニ參カル者聲又ハ啞ナル時之ニ文字ヲ以テ理會セシムル事ヲ得サル場合ニ限り通事ヲ立會ハシムル事ヲ得

舊第二百五十三條
獨第一百四十三條

第二百二十五條 裁判所ハ適當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原告若クハ被告又ハ訴訟代人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ禁シ且新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ代テ演述セシムヘキ事ヲ命スヘシ

裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ業トスル訴訟代人若クハ輔佐人ヲ退クル事ヲ得此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且斥退ノ決定ヲ原告又ハ

被告ニ送達スル事ヲ要ス

此條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ツル事ヲ得ス
第二百二十六條 辯論ニ參カリタル者秩序ヲ維持スル爲メ辯論ノ場所
ヨリ退ケラレタル時ハ申立ニ因リ本人任意ニ退キタルト同一ノ方
法ヲ以テ之ヲ取扱フ事ヲ得但帝國裁判所構成法第二百二十三條ニ依
リ中止シタル場合ハ此限ニ在ラス
前條ノ場合ニ於テ禁止又ハ斥退セラレタル者再ヒ出頭スル時ハ前
項ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フ事ヲ得

第二百二十七條 口頭辯論ニ付テハ調書ヲ作ル事ヲ要ス

調書ニハ左ノ諸件ヲ掲グル事ヲ要ス

- 第一 辯論ノ場所、年、月、日
- 第二 判事裁判所書記及ヒ立會フタル通事ノ氏名
- 第三 争訟物ノ表示及ヒ原告被告ノ氏名

第四 出頭シタル原告被告、法律上代人、辯護士、訴訟代人及ヒ

輔佐人ノ氏名若シ原告又ハ被告調席シタル時ハ其明記

第五 公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタル事及ヒ其理由

第二百二十八條 辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載スル事
ヲ要ス

調書ニ記載シテ明確ニスヘキ諸件ハ左ノ如シ

- 第一 自認、認諾、拋棄及ヒ和解
- 第二 明確ニスヘキ成規アル申立及ヒ陳述
- 第三 證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述以前聽カレサリシ時又其以
前ノ供述ニ異ナル時ニ限ル
- 第四 檢證ノ結果
- 第五 調書ニ添附セラレサル裁判(判決、決定及ヒ命令)
- 第六 裁判ノ言渡

舊第二百五十四
獨第四百十八

附録トシテ調書ニ添附セラレ且調書ニ附録トシテ表示セラレタル
書類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル記載ニ同シ

第二百二十九條 前條第二項第一號乃至第四號ニ於テ掲ケタル調書ノ
部分ハ法廷ニ於テ之ヲ當事者ニ讀聞カセ又ハ閱覽ノ爲メ之ヲ當事
者ニ提示ス

調書ニハ前項ノ手續ヲ爲シタル事及ヒ承諾アリタル事又ハ承諾ヲ
拒ミタル理由ヲ附記スル事ヲ要ス

舊第二百五十五
獨第四百四十九

第三百十條 調書ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印スヘシ

裁判長差支アル時ハ官廳最モ高キ陪席判事之ニ代リ署名捺印ス區
裁判所判事差支アル時ハ其裁判所書記ノ署名捺印ヲ以テ足ル

舊第二百三十六
獨第四百五十一

第三百十一條 受命判事若クハ受託判事又ハ區裁判所判事カ法廷外

ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁判所書記ヲ立會ハシム
前四條ノ規定ハ右ノ審問ニ付テノ調書ニ之ヲ準用ス

民訴ノ二七

舊第二百五十七
獨第四百五十

第三百十二條 口頭辯論ニ付キ規定シタル方式ヲ遵守シタル事ハ調

書ニ依リテノミ之ヲ證スル事ヲ得

其方式ニ關スル調書ノ旨趣ニ對シテハ偽造ノ證明ノミヲ爲ス事ヲ

許ス

備考

送達ト期日期間ノ二節ハ「モツセ」氏ノ起案ニ係ルヲ以テ例ニ倣
ヒ修正ヲ加タル條項ノミヲ掲ク

原第百六十六
舊第百六十三
獨第百五十二
同第百五十三
同第百五十四

第三百十三條 (第一項ハ原文ノ儘第二項中己レニ屬スルノ六字ヲ
削リ其所屬裁判所ノノ七字ヲ加フ第三項ハ原文ノ儘第四項ノ末段
郵便配達人ヲ下ノ規定ニ謂ヘル送達吏ト看做ストアルヲ郵便配達
人ヲ下ニ規定スル所ノ送達吏トスト改ム

(修正ノ理由) 第二項ハ構成法第百九條ノ文字ヲ用ヒ改メタル
モノナリ第四項ノ末段ニ看做ストアレトモ全ク配達人ヲ送達吏

トスルノ精神ナルカ故本文ノ如ク修正ヲ加フ

第百三十五條 (第一項ハ原文ノ儘)

公又ハ私ノ無形人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラル、事ヲ得ル會社又ハ
社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者ニ爲スヲ以テ足ル
數人ノ法律上代人又ハ數人ノ首長若クハ事務擔當者アル場合ニ於
テハ送達ハ其一人ニ爲スヲ以テ足ル

(修正ノ理由) 第二項ノ冒頭ヲ改メタルハ先例

(第十條)ニ依リタルモノナリ其末段ヲ二項ト爲シ少シク修正
ヲ加ヘタルハ其意味ヲ明カニシタルマテナリ

第百三十六條 現役ノ下士官以下ノ軍人軍屬ニ對スル送達ハ其直近
上班ノ司令官廳ノ長官ニ之ヲ爲ス

(修正ノ理由) 本條ハ第十一條ニ準シ假リニ修正セリ然レト
モ第十一條ヲ改正スルトキハ同時ニ改ム可キモノナリ

來二十八日(土曜日)會議議案(民事訴訟法

草案議案第十一號)報告委員も呈出相成候付

及御送付候也

明治廿一年四月廿六日

庶務擔任報告委員

原第百三十三條
舊第百三十六條
第十百六

原第百四十一條
舊第百一十六條
第十百六
原第百二十九條
舊第百九十六條
第十百六

民事訴訟法草案按應按第十一號

第三百三十七條 (原文ノ儘)

第三百三十八條 (原文ノ儘)

第三百三十九條 (本條第一項中代理權トアルヲ代理ヲ爲スノ權ト改
ム第二項ハ原文ノ儘)

(修正ノ理由) 本條第一項中被告ノ代理權ヲ有スルトアルモノハ
被告其者カ自ラ代理權ヲ有スルモノ、如ク解スルノ嫌アルヲ以
テ本文ノ如ク修正ヲ加フ

第四百十條 受訴裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ又營業場ヲモ有セサル
原告又ハ被告ハ其裁判所ノ命令ニ依リ又内國ニ於テ治外法權ヲ有
シ又ハ内國ニ住居ヲモ又營業場ヲモ有セサル原告又ハ被告ハ右ノ
命令ナキモ其裁判所ノ所在地ニ住居シ且本邦ノ裁判權ニ服從スル
第三者ノ方ニ於テ住所ヲ擬定スル事ヲ要ス但其原告又ハ被告力右

ノ地ニ住居シ且本邦ノ裁判權ニ服從スル訴訟代人ヲ任シタル時ハ此限ニ在ラス

前項ノ命令ハ職權ヲ以テ又ハ申立ニ因リ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲ス事ヲ得此決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツル事ヲ得ス

（修正ノ理由）第一項ハ意味ヲ明カニシタルマテナリ其末段ヲ二項トナシ「又其」ノ二字ヲ削リ前項ノ三字ヲ加ヘ修正シタルハ他ノ例ニ倣フタルモノナリ

第百四十一條 住所撰定ノ届出ハ遅ク共最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲シ又其前ニ書面ヲ差出ス時ハ其書面ヲ以テ之ヲ爲ス事ヲ要ス（第二項中「前期」ノ二字ヲ前條ト改メ又其末段送達ハ其書類ノ云々トアル送達ノ上ニ此ノ一字ヲ加フ）

（修正ノ理由）本條ヲ別條ニ改メタルハ前條ハ住所撰擇ノ方法ヲ定メ本條ハ其届出ノ方法ヲ定メタルモノニシテ自ラ事柄相分レ

ルヲ以テ獨逸訴訟法ニ倣ヒ條ヲ分チタリ而シテ聊カ文字ヲ改メタルハ意味ヲ明カニシタルマテナリ

第百四十二條 （本條中送達ヲ爲サルヘキトアルヲ送達ヲ受クヘキト改メ第百十八條トアルヲ第百三十五條ト改メ事務担当者トアルヲ事務担当者ト改ム）

（修正ノ理由）翻譯局ト協議上ニ出スル尤精神ニ異ナル事ナシ

第百四十三條 送達ヲ受クヘキ人ニ其住居ニ於テ不出會ハサル時ハ住居ニ於テスル送達ハ同居人ニ屬スル成長シタル親屬又ハ成長シタル雇人ニ之ヲ爲ス事ヲ得

此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スル事ヲ得サル時ハ其送達ハ交付スヘキ書類ヲ管轄各地官廳ニ預ケ置キ其告知書ヲ住居ノ戸ニ貼付シ且成ルヘキ丈ク近隣ニ住居スル者二人ニ口頭ニテ通知シテ之ヲ爲ス事ヲ得

原第百二十六
旧第百二十六
十編第八百六

原第百二十七
旧第百二十七
十編第九百一六

原第百二十八
旧第百二十八
十編第九百一六

（第三項ハ原文ノ儘）

（修正ノ理由）第一項ハ翻譯局ト協議上修正ス第二項ハ法律ノ精神ヲ明カニシタルモノナリ

第百四十四條（本條末段此規定ハ辯護士云々トアルヲ）又其營業者辯護士ナル時之ニ對スル送達ハ其營業場ニ在ル筆生ニ之ヲ爲ス事ヲ得ルト改ム）

（修正ノ理由）原文ニ此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス云々トアル甚タ疑ハシキ法文ナルカ故文ノ通り修正ス

第百四十五條（本條中第百十八條トアルヲ第百三十五條ト改メ事務担当者ニ出會ハストアルヲ事務擔當者ニ營業場ニ於テ出會ハスト改ム）

（修正ノ理由）翻譯局ト協議上ニ出スル勿論精神ニ異ナル事ナシ第百四十六條（第一項原文中第百二十六條トアルヲ第百四十四條

民訴意ノ八一

原第百二十九
旧第百二十九
十編第九百一七

原第百三十
旧第百三十
十編第九百一七

原第百三十一
旧第百三十一
十編第九百一七

第百四十七條（原文ノ儘）

第百四十八條（第一項ノ原文中日曜日及ヒ一般ノ祭日トアルヲ裁

判所ノ休日ト改メ第二項中適用スノ下ハ午後八時ヨリ午前六時マテト爲シタリ第三項中部長トアルヲ裁判長ト改メ地ノ管轄區裁判所々長トアルヲ地ヲ管轄スル區裁判所ノ判事ト改ム第四項ハ原

文ノ儘第五項ノ末段時ハ效力アリトアルヲ時ニ限り效力アリト改

日本法律家協會

原第百卅一
旧第百六十九
旧第百七十
獨第百七十三
同第百七十四

ム

（修正ノ理由）第一項ハ構成法第百四十四條ニ定メラレタル休日
ヲ將テ以テ裁判所ノ休日ト爲シ之ヲ修正セリ第二項中夜間ヲ午
後八時ヨリ午前六時マテト定メシハ獨逸法ノ如ク夏季ト冬季ト
時間ヲ異ニスル時ハ甚タ煩ハシク且人民モ誤リ易キ故獨逸法ニ
於テ定メシ夏季ノ中間ヲ取り之ヲ定メタリ第三項ハ構成法ニ基
キタルモノナリ第四項ノ末段ハ法文ヲ強クシタルマテナリ
第百四十九條 送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ地年月日并
ニ方法及ヒ受取人ノ受取ノ證并ニ送達吏ノ署名及ヒ捺印ヲ具備ス
ル證書ヲ作ル事ヲ要ス

（第二項ハ原文ノ儘第三項中第百二十三條第三項トアルヲ第百四十
一條第二項ト改メ官吏トアルヲ吏員ト改ム）

（修正ノ理由）第一項ハ送達ニ付キ證書ヲ作ル方法ヲ明カニシタ

民訴意ノ八二一

原第百三十二
旧第百六十七
獨第百七十三
八第百七十三

ルモノナリ第三項ハ前條項ヲ修正シタル結果ナリ

第百五十條 外國ニ在テ治外法權ヲ有スル本邦官吏及ヒ其家族從者
ニ對シ外國ニ於テ施行スヘキ送達ハ外務大臣ニ囑託シテ之ヲ爲ス

（修正ノ理由）第十二條ヲ修正シタル法文ニ基キタルモノナリ尤
本條ノ修正ヲ採用セラル時ハ第十二條中括弧ヲ省ク精神ナリ

第百五十一條 （本條冒頭ノ其他トアルヲ前條ノ外ト改ム以下原文
ノ儘）

（修正ノ理由）原文ニ其他ト云フ時ハ甚タ漠然トシテ解シ易カラ
サル故前條ノ外ト改メタリ

原第百三十三
旧第百七十七
獨第百八十二
八第百八十二

來四日（金曜日）會議議按（民事訴訟法草案
議案第十二號）報告委員より呈出相成候付及
御送付候也

明治廿一年五月二日

庶務擔任報告委員

民事訴訟法草案按議案第十二號

第一百五十二條 外國ニ在留スル軍隊又ハ出陣ノ軍隊又ハ役ニ服シタ

ル軍艦（以下原文ノ儘）

（修正ノ理由）原文ノ冒頭ニ「通、常、ハ、兵、營、地、外、ニ、在、ル、軍、隊、ト、ア、ル、十、
二、字、ヲ、削、リ、外、國、ニ、云、々、ト、改、メ、タ、ル、モ、ノ、ハ、原、文、ノ、如、ク、ニ、テ、ハ、彼、ノ
野營演習ノ場合杯モ本條中ニ包含スヘキモノ、如ク誤解ヲ生ス
ルノ恐レアルヲ以テナリ尤起案者ハ獨逸訴訟法第百八十四條ニ
倣ヒ「モビールン」ナル語ヲ用ヒント欲スレ共日本ノ陸軍省ニ
於テ此語ヲ用ヒ來ル否ヲ辨ヘサルカ故原文ノ如キ考案ヲ起シタ
リト云フ然ルニ陸軍省ニ於テハ昨今獨逸語ノ「モビール」ナル
文字ヲ假リニ「動員ノ命」ト譯シ用ヒ始メタレ共未タ確定セス
ト依テ不日陸軍省ニ於テ右ノ語ヲ定メ之ヲ用ヒラル事ニ決スル
時ハ本條モ尙修正ヲ加フヘキモノナリ

三〇五 七〇五 八〇五 九〇五 一〇〇五 一〇五〇 一〇五五 一〇六〇 一〇六五 一〇七〇 一〇七五 一〇八〇 一〇八五 一〇九〇 一〇九五 一〇九九 一〇九九

第三百五十三條 (第一項中部長トアル二字ヲ裁判長ト改ム餘ハ原文ノ儘)

第三百五十四條 (原文ノ儘) (修正ノ理由) 先例ニ倣ヒタルモノナリ

第三百五十五條 (第一項第二項ハ原文ノ儘第三項ノ末原告被告ノ下ニ雙方トアル三字ヲ削ル)

(修正ノ理由) 原告被告ト云フ時ハ總テ原被告雙方ヲ指スノ文例ナルカ故本條ニ限リノ雙方ナル字ヲ加フヘキ必要ヲ見ス

第三百五十六條 (第一項中又一箇又ハ數箇ノ新聞紙ヲ以テスル告示ハ場合ニ於テハ拔書ハ最後ハ掲載ヨリノ三十五字ヲ削ル其餘原文ノ儘) (修正ノ理由) 新聞紙ニ掲ケタル時其最後ノ掲載ヨリ起算スヘキモノトスル時ハ外國ノ新聞紙等ニ掲ケタル場合ニ於テハ最後ノ

民衆訴意ノ八四

三〇九 八〇九 九〇九 一〇〇九 一〇五九 一〇六四 一〇六九 一〇七四 一〇七九 一〇八四 一〇八九 一〇九四 一〇九九 一〇九九

掲載ヲ知ルニ煩雜ヲ來スヘキ故右數字ヲ削リタリ

第三百五十七條 期日ハ裁判長日及ヒ時ヲ以テ之ヲ定ム

(修正ノ理由) 原文中スル期日ノ定メ以下ヲ削リ本文ノ如ク修正シタルモノハ文意ヲ明カニシタルマテナリ

第三百五十八條 日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ヲ期日トシテ定ムルハ已ムヲ得サル場合ニ限リ之ヲ爲ス事ヲ得

(修正ノ理由) 期日ハ云々之ヲ日曜日及ヒ一般ノ祭日ニ定ムト云フ時ハ命令法ノ如ク見ユレ共本條ハ許可法ニ爲スヘキモノト思

考スルヲ以テ本文ノ如ク修正ス 第三百五十九條 必要ナル呼出ハ裁判長ノ命ニ從ヒ裁判所書記正本ノ送達ヲ以テ之ヲ爲ス

(第二項ハ原文ノ儘)

(修正ノ理由) 第一項中ハ部長ノ命ニ從ヒノ八字及ヒニ因テ必要

原第一〇九 四第一〇九 獨第一〇九 九第一〇九

原第一〇七 八第一〇七 獨第一〇七 九第一〇七

原第四百二十九
舊第四百二十九
獨六百一十九

原第四百三十三
舊第四百三十三
獨六百七十七

原第四百四十四
舊第四百四十四
獨六百八十八

ナル呼出ノ九字ヲ削リ本條ノ如ク修正シタルモノハ本項ハ呼出
シノ事ヲ主トシテ掲ケタルモノナルカ故必要ナル呼出ノ數字ヲ
冒頭ニ出シタリ

第六十條 (本條但書中臨檢ノ下ニヲ爲シ又ハノ五字ヲ加ヘ審問
ノ下ノ又ハノ二字ヲ削ル)

(修正ノ理由) 本條ハ唯趣意ヲ明瞭ニシタルマテナリ
第六十一條 (第一項ハ原文ノ儘)

期日ハ原告又ハ被告カ其期日ノ終リマテニ辯論ヲ爲サ、ル時ハ之
ヲ怠リタルト看做ス

(修正ノ理由) 第二項中呼上ノ際ニモ又審問ノ九字及ヒ結前ニモ
出頭ヲ申込マサル十一字ヲ削リ本文ノ如ク修正シタルハ意味ヲ
明カニシタルモノナリ

第六十二條 裁判官ノ定ムル期間ノ經過ハ期間ヲ定メタル書類ノ

民訴意ノ八五

送達ヲ以テ始マリ又其送達ヲ要セサル場合ニ於テハ(以下原文ノ
儘)

(修正ノ理由) 原文中所、又、ハ、部、長、ニ、於、テ、長、短、ヲ、ノ、十、一、字、及、ヒ、此、ハ、
如、キ、ノ、五、字、ヲ、削、リ、本、文、ノ、如、ク、修、正、シ、タ、ル、ハ、獨、逸、訴、訟、法、第、百、九、十、
八、條、ニ、倣、ヒ、贅、文、ヲ、省、キ、タ、ル、モ、ノ、ナ、リ

第六十三條 (本條中訴訟法上ノ四字ヲ削リ其餘ハ原文ノ儘)

(修正ノ理由) 原文中訴訟法上ノ四字ヲ本條ニ限り用ユヘキ必要
ヲ見サルノミナラス反テ疑義ヲ生スル嫌アルヲ以テ之ヲ省キタ
リ

第六十四條 (第一項ノ末段ヲ「一个年ハ法事上ノ曆ニ從フ」ト

改メ第二項中「一般ノ祭日」トアルヲ「一般ノ祝祭日」ト改ム
(修正ノ理由) 第一項中ノ長サノ三字及ヒ依テ定マルノ五字ヲ削
リ從フノ二字ヲ加ヘタルハ治罪法ニ照シ修正シタリ又第二項ニ

原第四百五十九
舊第四百五十九
獨六百二十九

原第四百六十三
舊第四百六十三
獨六百三十三

祝ノ一字ヲ加ヘタルハ先例ニ倣フ

第六十五條 一第一項ノ冒頭ヲ「法律上ノ期間ハ」ト改メ以下原文ノ儘

一修正ノ理由一第一項ノ原文ニ此法律ニ於テ定メタル期間ハトアルヲ原文ノ如ク修正シタルハ文詞ヲ簡單ニシタルマテナリ

第六十六條 一第一項ハ原文ノ儘第二項第三項ハ其原文ヲ削リ更ニ第二項第三項ヲ左ノ如ク設定ス

前項ノ規定ハ不可變期間及ヒ休暇事件ニ付テノ期間ニハ之ヲ適用セス

不可變期間ハ此法律ニ於テ不可變期間トシテ掲ゲタル期間ヲ謂フ

一修正ノ理由一獨逸訴訟法ノ如ク控訴、上告、抗告、故障及ヒ再審等ノ期間ヲ不可變期間トシテ訴訟法中ニ明記スル時ハ實際上

甚々便利ナルヲ以テ獨法ニ倣ヒ修正ヲ加ヘタリ

又休暇事件ノ説明ヲ此法律ニ掲ケサルモ構成法ニ明カナル故之ヲ掲ケス

來五日（土曜日）會議議案（民事訴訟法草案）
議按第十三號）報告委員も呈出相成候付及御
送付候也

明治廿一年五月三日

庶務擔任報告委員

原第百四
十九ノ一
旧第百
九十六
獨第百
六十六

民事訴訟法草案議案第十三號

第六十七條 期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ爲メニスル期日ノ定ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス事ヲ得但申立ニ因レル期日ノ變更ハ合意ノ場合ヲ除クノ外顯著ナル理由アルニアラサレハ之ヲ許サス

（修正ノ理由）原文第一項ヲ本文ノ如ク全ク改正シテ之ヲ一條ニ爲シタルモノハ原文ハ甚々解シ難キ所アルニ付獨訴訟法第二百六條ヲ斟酌シテ修正ヲ加ヘ而シテ第二、三項ハ少シク相變ルヲ以テ別條トス

原第百四
十九ノ二
以下
獨第百
二十二

第六十八條 期間ハ不可變期間ヲ除クノ外原告被告ノ合意ヲ以テ之ヲ短縮又ハ伸張スル事ヲ得

裁判官ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナキモ申立ニ因リ顯著ナル理由アル時ハ之ヲ短縮又ハ伸張スル事ヲ得然レ共法律上ノ

期。間。ノ。短。縮。又。ハ。伸。張。ハ。此。法。律。ニ。於。テ。特。ニ。定。メ。タ。ル。場。合。ニ。ア。ラ。サ。レ。ハ。之。ヲ。許。サ。ス。

期。間。ノ。伸。張。ニ。在。テ。ハ。新。タ。ナ。ル。期。間。ハ。前。期。間。滿。了。ヨ。リ。之。ヲ。起。算。ス。

（修正ノ理由）不可變期間ヲ法文ニ顯ハシ且前條ヲ修正シタル上

ハ本條モ亦獨逸訴訟法第二百二條ノ如キ法文ヲ加ヘサルヲ得ス

依テ本文ノ如ク修正セリ又第三項中但書ヲ削リタルハ必要ヲ見

サルカ故ナリ

第百六十九條 期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若クハ伸張ニ付テノ申請

ノ理由ハ之ヲ説明スル事ヲ要ス其申請ハ裁判所書記ニ口述シテ其

調書ヲ作ラシムル事ヲ得

申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲ス事ヲ得

（原第二項ハ原文ノ儘）

期日ノ變更又ハ期間ノ伸張ニ付テノ申請ヲ却下スル裁判ニ對シテ

ハ不服ヲ申立ツル事ヲ得ス

（修正ノ理由）第一項ノ末ニ其申請云々ヲ加ヘ又ハ新タニ第二項

ヲ置キタルハ先例ニ倣ヒタルモノナリ期日ノ變更云々ノ末項ヲ

新タニ加ヘタルハ獨逸訴訟法第二百三條ノ末項ヲ必要ト感シタル

カ故ナリ

第百七十條 （本條中部長トアルヲ裁判長ト改メ）受命判事トア

ル下ニ又ハ受託判事ノ六字ヲ加フ

（修正ノ理由）先例ニ倣ヒタルモノナリ

本章第四節第五節モ亦第一節ノ例ニ倣ヒ全文ヲ攝ク

第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

第百七十一條 訴訟行爲ヲ怠リタル原告又ハ被告ハ其爲スヘキ訴訟

行爲ヲ爲スノ權ヲ失フ但此法律カ其追完ヲ許ス時ハ此限ニ在ラス

懈怠ノ法律上ノ結果ハ當然生ス但此法律カ失權ヲ爲サシムル事ニ

付テノ相手方ノ申立ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

第七十二條 天災又ハ其他避クヘカラサル事變ニ因リ不可變期間
ヲ遵守スル事ヲ妨ケラレタル原告又ハ被告ニハ申立ニ因リ原狀回
復ヲ許與ス

原告又ハ被告カ故障ノ期間ヲ懈怠シタル時ハ其過愆ニアラスシテ
懈怠判決ノ送達ヲ知ラサリシ場合ニ於テモ亦之ニ原狀回復ヲ許與
ス

第七十三條 原狀回復ハ十四日ノ期間内ニ之ヲ申立ツル事ヲ要ス
期間ハ障礙ノ止ミタル日ヲ以テ始マリ其期間ハ原告被告ノ合意ニ
因リ之ヲ伸フル事ヲ得ス

懈怠シタル不可變期間ノ終ヨリ起算シテ一ノ年ノ滿了ノ後ハ最早
原狀回復ヲ申立ツル事ヲ得ス

第七十四條 原狀回復ハ追完シタル訴訟行為ニ付キ裁判ヲ爲スノ

權アル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ申立ツ

其書面ニハ左ノ諸件ヲ掲クル事ヲ要ス

第一 原狀回復ノ原由タル事實

第二 原狀回復ノ疏明ノ方法

第三 懈怠シタル訴訟行為ノ追完

即時ノ抗告ノ提出ヲ懈怠シタル時ハ原狀回復ノ申立ハ不服ヲ申立テ
ラレタル裁判ヲ發シタル裁判所ニモ又抗告裁判所ニモ之ヲ爲ス事ヲ得

第七十五條 原狀回復ノ申立ニ付テノ訴訟手續ハ追完シタル訴訟
行為ニ付テノ訴訟手續ト之ヲ併合ス然レ共裁判所ハ訴訟手續ヲ先
ツ申立ニ付テノ辯論及ヒ裁判ノミニ制限スル事ヲ得

申立ノ許否ニ付テノ裁判及ヒ裁判ノ不服申立ニ付テハ追完シタル
訴訟行為ニ付キ此等ノ關係ニ於テ行ハル、成規ヲ適用ス然レ共申
立ヲ爲シタル原告又ハ被告ハ故障ヲ爲スノ權ナシ

原狀回復ノ費用ハ相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生セサリシモノニ
限リ申立人ノ負擔ニ歸ス

第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

第七十六條 原告又ハ被告ノ死亡シタル場合ニ於テハ承權人カ訴

訟手續ヲ受繼クマテ之ヲ中斷ス

裁判所ハ申立ニ因リ受繼ヲ遲滯シタル承權人ヲ其受繼及ヒ本事件

ノ辯論ノ爲メ呼出ス但受繼ノ遲滯ハ申立人之ヲ疏明スヘシ

呼出ハ承權人其者ニ之ヲ送達ス

承權人期日ニ出頭セサル時ハ申立ニ因リ其主張セラレタル承權ヲ

自認シタルモノト看做シ且裁判所ハ懈怠判決ヲ以テ承權人カ訴訟

手續ヲ受繼キタリト言渡ヌ又本事件ノ辯論ハ故障期間ノ滿了シタ

ル後始メテ之ヲ爲シ又ハ其期間内ニ故障ヲ申立テタル時ハ其完結

ノ後始メテ之ヲ爲ス

第七十八條 原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其法律上代人

カ死亡シ又ハ其代理權カ原告若クハ被告ノ訴訟能力ヲ得ル前ニ消

滅シタル時ハ訴訟手續ハ法律上代人又ハ新法律上代人カ其任設ヲ

相手方ニ通知シ又ハ相手方カ訴訟手續ヲ續行セント欲スル事ヲ其

代人ニ通知スルマテ之ヲ中斷ス

第七十九條 原告又ハ被告ノ死亡ニ因リ訴訟手續ヲ中斷スル場合

ニ於テ訴訟手續ノ受繼ニ關シテハ遺産ニ付キ保管人カ任設セラル

ト時ハ第七十八條又遺産ニ付キ破産カ開始スル時ハ第七十七

條ノ成規ヲ適用ス

第八十條 戰爭又ハ其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタル時

ハ此情況ノ繼續スル間訴訟手續ヲ中斷ス

第八十一條 原告若クハ被告死亡シ又ハ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其法

律上代人ノ欠缺スル場合ニ於テハ第七十七條第七十八條一訴

訟代人ニ因リ代理カ爲サレタル時ハ委任消滅ノ通知ニ因リ訴訟手續ヲ中斷ス

訴訟手續ノ受繼ニ付テハ第七十六條第七十八條第七十九條ノ成規ニ從フ

來十一日（金曜日）會議案（民事訴訟法草案第十四號）報告委員より呈出相成候付及御送付候也

明治廿一年五月九日

庶務担任報告委員

獨第百廿四

民事訴訟法草案議案第十四號

第八十二條 原告又ハ被告ノ戰時兵役ニ服スル時又ハ官廳ノ布令

戰爭若クハ其他ノ事變ニ因リ受訴裁判所トノ交通ヲ絶タレタル地ニ在ル時ハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ障礙ノ除去セラル、マテ訴訟手續ヲ中止ヲ命スル事ヲ得

獨第百廿五

第八十三條 訴訟手續中止ノ申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ提出ス其申

請ハ裁判所書記ニ口述シテ調書ヲ作ラシムル事ヲ得

裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲ス事ヲ得

獨第百廿六

第八十四條 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止ハ期間ノ經過ヲ止メ及ヒ中斷又ハ中止ノ終リタル後更ニ全期間ノ經過ヲ始メシムルノ效力ヲ有ス

中斷及ヒ中止中本事件ニ付キ原告又ハ被告ノ爲シタル訴訟行為ハ他ノ一方ニ對シ法律上ノ效力ヲ有セス

獨第百廿七

口頭辯論ニ基キテ爲スヘキ裁判ノ曾渡ハ此辯論ノ終結シタル後ニ始マリタル中斷ニ因リ妨ケラル、事無シ

第百八十五條 中斷シ又ハ中止シタル訴訟手續ノ受繼及ヒ記載シタル通知カ原告又ハ被告ヨリ其書面ヲ受訴裁判所ニ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達スヘシ

第百八十六條 原告被告ハ訴訟手續ヲ休止スヘキ事ヲ合意スル事ヲ得其合意ハ不可變期間ノ經過ニ影響ヲ及ボサス

口頭辯論ノ爲メノ期日ニ於テ原告被告双方カ出頭セサル時ハ訴訟手續ハ其一方ヨリ口頭辯論ノ爲メ更ニ期日ヲ定ムヘキ事ヲ申立ルマテ之ヲ休止ス

一年內ニ前項ノ申立ヲ爲サ、ル時ハ其訴及ヒ反訴ヲ取下ケタルモノト看做ス

獨第百廿九

第百八十七條 此節ノ成規又ハ其他此法律ノ規定ニ基キ訴訟手續ノ

民訴意ノ九二

中止ヲ命スル裁判又ハ之ヲ否ム裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲ス事ヲ得但拒否ノ場合ニ於テハ即時ノ抗告ヲ爲ス事ヲ得

次ノ一節ハ「モツセ」氏ノ起案ニ係ルモノト旧案ニ依リタルモノト又新タニ加ヘタル條項ト混同シタル節ナルカ故ニ先例ニ倣ヒ逐條全文ヲ掲ク

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第一節 判決ニ至ルマテノ訴訟手續

第八十八條、訴ノ提起ハ訴狀ヲ裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

訴狀ニハ左ノ諸件ヲ掲クル事ヲ要ス

第一 原告被告及ヒ裁判所ノ表示

第二 起シタル請求ノ目的物及ヒ其請求ノ原由ノ定マリタル明示

第三 定マリタル申立

其他訴狀ニハ裁判所ノ管轄力争訟物ノ價額ニ繋ル時ハ定マリタル

金額ニアラサル争訟物ノ價額ヲ掲クヘシ

準備書面ニ關スル一般ノ規定ハ訴狀ニモ亦之ヲ適用ス

第八十九條 同一ノ被告ニ對スル原告ノ數個ノ請求ハ其總テノ請

求ニ付キ受訴裁判所力管轄權ヲ有シ且同一種類ノ訴訟手續カ許サ

原第〇一條
旧第百八
八第百九
九第百三
十

原第〇二條
旧第百一
十第百二
世第百二

原第〇三條
舊第百十二條

レタル時ハ一個ノ訴ニ併合スル事ヲ得但民法ノ規定ニ反スル時ハ此限ニ在ラス

第百九十四條 訴狀カ第百八十八條第一號乃至第三號ノ規定ニ適セサル時ハ相當ニ定メラルヘキ期間内ニ其欠缺ヲ補正スヘキ事ヲ命令ヲ以テ命シ又原告カ此命ニ從ハサル時ハ其期間ノ滿了後訴狀ヲ差戻ス事ヲ要ス

其差戻ノ命令ニ對シテハ即時ノ抗告ヲ爲ス事ヲ得

原第〇四條
ノ一

第百九十一條 訴狀カ第百八十八條第一號乃至第三號ノ規定ニ適スル時ハ之ヲ被告ニ送達スル事ヲ要ス

原第〇四條
ノ二
獨第百廿四

第百九十二條 口頭辯論ノ期日ト訴狀ノ送達トノ間ニ少クトモ二十日ノ期限ヲ存スル事ヲ要ス

原第〇五條
舊第百十三條
編第百廿五

送達ヲ外國ニ於テ爲スヘキ時ハ裁判長相當ノ期限ヲ定ム
第百九十三條 争訟物ノ權利拘束ハ訴狀ノ送達ニ因テ生ス

原第〇六條
舊第百十四條
獨第百四十

權利拘束ハ左ノ效力ヲ有ス

第一 權利拘束ノ繼續中争訟物カ原告又ハ被告ヨリ他ノ裁判所ニ於テ拘束セラル、時ハ相手方ハ權利拘束ノ抗辯ヲ起ス事ヲ得

第二 受訴裁判所ノ管轄ハ争訟物ノ價額ノ變更、住所ノ變更又ハ其他管轄ヲ定ムル狀況ノ變更ニ因テ動カサレス

第三 原告ハ訴ノ原由ヲ變更スルノ權利ナシ但被告カ變更セラレタル訴ニ付キ本事件ノ口頭辯論ヲ爲ス前其變更ニ對シ異議ヲ述ヘサル時ハ此限ニ在ラス

第百九十四條 原告カ訴ノ原由ヲ變更セシテ左ノ諸件ヲ爲ス時ハ被告ハ異議ヲ述フル事ヲ得ス

第一 事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スル事

第二 本事件又ハ附帶ノ請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ制限スル事

原第七條
獨第二百
四十二

原第八條
獨第二百
四十三

第三 最初求メラレタル物カ後ニ滅盡又ハ變更シタルニ因リ其物
ニ換ヘテ他ノ物又ハ賠償ヲ求ムル事

第九十五條 訴ノ原由ノ變更カ存セストスル裁判ニ對シテハ不服
ヲ申立ツル事ヲ許サス

第九十六條 訴ノ全部又ハ一分ハ口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被
告ノ承諾ヲ得テ又本事件ニ付キ被告ノ第一口頭辯論ノ始マルマテ
ハ被告ノ承諾ナクシテ之ヲ取下タル事ヲ得

訴ノ取下ハ口頭辯論ノ際之ヲ述ヘサル時ハ書面ヲ以テ之ヲ爲ス又
訴狀カ既ニ送達セラレタル場合ニ於テハ書面ハ之ヲ被告ニ送達ス
ル事ヲ要ス

適法ナル取下ハ權利拘束ノ總テノ效力ヲ消滅セシムルノ結果ヲ生
ス
訴カ再ヒ起サレタル時ハ被告ハ前訴訟ノ費用ノ辨償ヲ受クルニ至

ルマテ應訴ヲ拒ム事ヲ得

來十二日（土曜日）會議議案（民事訴訟法
草按議案第十五號）報告委員より呈出相成候
條及御送付候也

明治廿一年五月十日

庶務擔任報告委員

原第〇九
旧第百
十七百
獨第百
四十四

原第〇十

民事訴訟法草案議案第十五號

第九十七條 訴狀ノ送達ノ際被告ハ十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差
出スヘキ事ヲ命令ヲ以テ催告セラル、事ヲ要ス
答辯書ニハ準備書面ニ關スル一般ノ成規ヲ適用ス

第九十八條 訴カ其管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタル時ハ被
告ハ原告ニ對シ同一ノ裁判所ニ反訴ヲ起ス事ヲ得
然レ共財産權上ノ請求ニアラサル請求ニ係ル反訴又ハ其目的物ニ
付キ專屬管轄力規定セラレタル反訴ハ若シ其反訴カ訴ナル時ハ裁
判所ニ於テ管轄權ヲ有スヘキ場合ニアラサレハ之ヲ爲ス事ヲ許サ
ス

反訴ニ對シテハ更ニ反訴ヲ爲ス事ヲ得ス
第九十九條 反訴ハ答辯書若クハ特別ノ書面ヲ以テ又ハ口頭辯論

中相手方ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ起ス事ヲ得

原第〇十一

原第○
十二

原第○
十五

原第○
十六
旧第○
二百
三
編第○
二百
四
十五

然レ共答辯書差出ノ期間内ニ差出シタル書面ヲ以テ起サ、ル反訴
ハ被告ノ請求ノ全部又ハ一分ト相殺ヲ爲スヘキ場合ニ於テ同時ニ
被告カ自己ノ過失ナクシテ以前其反訴ヲ起ス能ハサリシ事ヲ疏明
スル時ニアラサレハ之ヲ爲ス事ヲ許サス

第二百條 訴ニ關スル此法律ノ成規ハ反訴ニ之ヲ適用ス但其規定ニ
因リ殊異カ生スル時ハ此限ニ在ラス

第二百一條 裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第九十七條ニ定メ
タル期間ハ之ヲ相當ニ伸長シ又第九十二條ニ定メタル期限ハ切
迫ナル危險ノ場合ニ於テハ二十四時マテ之ヲ短縮スル事ヲ得

第六十五條ニ掲ケタル成規ハ此規定ニ因リ動カサル、事無シ

第二百二條 原告被告ノ各方ハ訴狀又ハ答辯書ニ掲ケサリシ事實上
ノ主張若クハ舉證方法若クハ申立ニシテ之ニ付キ相手方カ豫メ穿
鑿ヲ爲スニアラサレハ陳述ヲ爲ス事能ハスト豫知スルモノヲ口頭

民訴意ノ九七

辯論ノ前其書面ヲ差出スヘシ但相手方ヘノ書面ノ送達ヲ爲スノ時
間及ヒ相手方ヲシテ必要ナル穿鑿ヲ爲スノ時間ヲ得セシムル事ヲ
要ス

口頭辯論ノ延期ヲ爲ス時裁判所ハ爾後必要ナル準備書面ヲ差出ス
ヘキ爲メノ期間ヲ定ムル事ヲ得

第二百三條 口頭辯論ハ一般ノ成規ニ從ヒ之ヲ爲ス

第二百四條 妨訴ノ抗辯ハ本事件ニ付テノ被告ノ辯論前ニ同時ニ之
ヲ提出スヘシ

左ノ掲クルモノヲ妨訴ヲ抗辯トス

第一 訴訟ヲ許スヘカラサルノ抗辯

第二 裁判所管轄違ノ抗辯

第三 權利拘束ノ抗辯

第四 訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辯

編第○
二百
四十六
編第○
二百
三十五
編第○
二百
四十七

第五 訴訟費用ノ爲メノ保證欠缺ノ抗辯

第六 争訟ノ再起ニ付キ前訴訟手續ノ費用ヲ辯償スヘキニ未タ之ヲ辯償セサルノ抗辯

本事件ニ付キ被告ノ口頭辯論ノ始マリタル後ハ妨訴ノ抗辯ハ被告ニ於テ有效ニ拋棄スル事ヲ得ヘカラサルモノナル時又ハ被告過失ナクシテ本事件ノ辯論前其抗辯ヲ主張スル能ハサリシ事ヲ説明スル時ニ限り之ヲ主張スル事ヲ得

旧第二百三十五ノ申
獨第二百四十八

第二百五條 被告カ妨訴ノ抗辯ニ基キ本事件ノ辯論ヲ拒ム時又ハ裁判所ハ申立ニ因リ若クハ職權ヲ以テ別ニ辯論ヲ命スル時ハ其抗辯

ニ付キ別ニ辯論ヲ爲シ及ヒ判決ヲ以テ裁判スヘシ

妨訴ノ抗辯ヲ棄却スル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做ス但裁判所ハ申立ニ因リ本事件ニ付キ辯論ヲ爲スヘキ事ヲ命スル事ヲ得

民訴意ノ九八

旧第二百六ノ中
獨第二百一十一

第二百六條 攻撃及ヒ防禦ノ方法（抗辯、反訴、再抗辯等）ハ第九十九條ノ規定ニ依レル制限ヲ以テ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終

結ニ至ルマテ之ヲ主張スル事ヲ得

然レ共裁判所ハ時機ニ後クレテ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタルニ因リ争訟ノ完結カ遅延セラレタル時ハ裁判官ノ心證ニ因リ遅延ノ實アリト爲サレタル勝訴ノ原告又ハ被告ニ訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ課スル事ヲ得

旧第二百六ノ末
獨第二百一十二

第二百七條 被告ヨリ時機ニ後クレテ提出シタル防禦ノ方法ハ裁判所カ若シ之ヲ許スニ於テハ訴訟ヲ遅延スルニ至ルヘク且被告ハ訴訟ヲ遅延セシムルノ故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ更ニ早ク其提出ヲ爲サレリシノ心證ヲ得タル時ハ申立ニ因リ之ヲ却下スル事ヲ得

獨第二百一十三

第二百八條 判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ争訟ノ裁

旧第二百三十七條
獨第二百四十四條

旧第二百三十八條
獨第二百五十五條

旧第二百三十九條
獨第二百五十六條

判ノ全部又ハ一^分部カ訴訟ノ經過中争ヒトナリタル權利關係ノ成立
又ハ不成立ニ繫ル時ハ原告ハ訴ノ申立ノ擴張ニ因リ又被告ハ反訴
ノ提起ニ因リ判決ヲ以テ其權利關係ヲ確定セラレン事ヲ申立ツル
事ヲ得

第二百九條 訴狀又ハ其他ノ準備書面ニ於テ主張セラレサル請求ノ
權利拘束ハ其請求カ口頭辯論ニ於テ主張セラレタル時ヲ以テ始マ
ル

第二百十條 原告被告ノ各方ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辯駁
セン爲ノニ用ヒントスル舉證方法ヲ申出テ且相手方ヨリ申出タル
舉證方法ニ付キ陳述スル事ヲ要ス

第二百十一條 舉證方法及ヒ舉證抗辯ハ舉證方法ノ適法、法律上ノ
效力及ヒ信用ニ對スル抗辯ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結ニ
至ルマテ之ヲ主張スル事ヲ得

民訴意ノ九九

舉證方法及ヒ舉證抗辯ノ時機ニ後クレタル提出ニ付テハ第二百六
條第二項及ヒ第二百七條ノ規定ヲ準用ス

來十八日（金曜日）會議議案（民事訴訟法草案）
案議按第十六號一報告委員も呈出相成候付及
御送付候也

明治廿一年五月十六日

庶務擔任報告委員

獨第百五十七

民事訴訟法草案議案第十六號

第二百十二條 採證及ヒ舉證決定ニ依レル特別採證手續ノ命令ハ第

四節乃至第十節ノ成規ニ依ル

舊第百七十八
獨第百五十八

第二百十三條 原告被告ハ爭訟ノ關係ヲ表明シ採證ノ結果ニ付キ辯

論ヲ爲ス事ヲ要ス

舊第百六十
獨第百五十九

採證カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ爲サレタル時ハ原告被告
告ハ採證ニ關スル審問調書ニ基キ其結果ヲ演述スル事ヲ要ス

第二百十四條 裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定ニ反セサル限りハ辯

論ノ全旨趣及ヒ或ル採證ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナ

リト認ムヘキヤ否ヲ自由ナル心證ヲ以テ判定スル事ヲ要ス

舊第百六十三
獨第百六十四

第二百十五條 裁判所ニ在リテ顯著ナル事實ハ之ヲ證スル事ヲ要セ

ス

舊第百六十八
獨第百六十五

第二百十六條 外國ノ現行法又ハ內國ノ地方慣習法、商慣習及ヒ規

約ハ之ヲ證スヘシ裁判所ハ原告被告カ其證明ヲ提出スルト否トニ
拘ハラズ職權ヲ以テ其必要ナル取調ヲ爲ス事ヲ得

旧第二百
六十三
獨第二百
六十六

第二百十七條 此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張カ疏明セラルヘキ
時ハ裁判官ノ意見ニ於テ其主張ヲ眞實ナルヘシト認メシムヘキ舉
證方法又ハ舉證原由ヲ以テ足ル但即時ニ爲ス事ヲ得サル採證ハ之
ヲ許サス

旧第二百
四十一
獨第二百
六十八

第二百十八條 裁判所ハ事件ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス自ラ又
ハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ争點ノ和解ヲ試ムルノ權アリ和
解ヲ試ムル爲メニハ原告被告ノ自身ノ出頭ヲ命スル事ヲ得
第二百十九條 申立ハ準備書面ニ依リ之ヲ朗讀スル事ヲ要ス

獨第二百
六十九

準備書面カ付與セラレス又ハ申立カ其書面中ニ掲ケラレサルモノ
ニ限り調書ニ附録トシテ添附スヘキ書面ヲ差出シ之ヲ朗讀スル事
ヲ要ス

民訴意ノ一〇一

重要ノ點ニ於テ以前朗讀セラレタルモノト異ナル申立ニ付テモ亦
前項ニ同シ

獨第二百
七十

此成規ヲ遵守セサル時ハ申立アラサルモノト看做ス
第二百二十條 前條ノ申立ヲ除クノ外準備書面ニ掲ケラレサル重要
ナル陳述又ハ其書面ノ旨趣ト重要ノ點ニ於テ異ナルモノハ其殊異
カ附加、刪除又ハ其他ノ變更ニ係ルト否トヲ問ハス申立ニ因リ又
ハ職權ヲ以テ調書又ハ其附録トシテ添附スヘキ爲メ差出シタル書
面ニ依テ之ヲ明確ニスヘシ

旧第二百
六十六
獨第二百
七十一

第二百二十一條 原告被告ハ訴訟記録ヲ展閱シ且裁判所書記ヲシテ
其正本、拔書及ヒ謄本ヲ付與セシムル事ヲ得
裁判長ハ第三者カ權利上ノ利害ヲ疏明スル時ニ限り原告被告ノ承
諾ナクシテ記録ノ展閱及ヒ其拔書并ニ謄本ノ付與ヲ許ス事ヲ得
判決、決定、命令ノ草案及ヒ其準備ニ供シタル書類并ニ評議又ハ

處罰ニ關スル書類ハ之ヲ提示セシメス且其謄本ヲ付與セス

日本學術振興會

民訴意ノ一〇二

左ノ第二節ヨリハ全ク旧案ヲ原トシテ取調ヘ修正ヲ爲シタルモノニ係ル是ヲ以テ常例ニ復シ修正ノ條項ヲ掲ケ多少ノ説明ヲ付シ而シテ旧案ヲ削リタルト新條ヲ加ヘタルトニ論ナク總テ旧案ノ十五條ツ、テ以テ一會ノ議案ニ呈ス

第二節 判決

第二百二十二條 争訟カ裁判ヲ爲スニ熟スル時ハ裁判所ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ發ス

同時ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス爲メ併合セラレタル數箇ノ訴訟ノミカ裁判ヲ爲スニ熟スル時ハ亦前項ニ同シ

（修正ノ理由） 第一項中本事件又ハ豫メ特別ニ完結スヘキノ十五字ヲ削リ點ヲ訟ニ改メ判決ノ上ニ終局ノ二字ヲ加ヘタルハ終

局判決ト中間判決トノ區別ヲ立テ本項ニ於テ一般ノ終局判決ノ原則ヲ定メシモノナリ

旧第三
百一
十七
條第
二
百
七
十
二
條

日本學術振興會

第二項中同時ノトアルヲ同時ニト改メ裁判ノトアルヲ裁判ヲ爲
スト改メ互ニノ二字ヲ削リ併合セルトアルヲ併合セラレタルト
改メ訴訟トアル下中ニテ其二ノ五字ヲ削リタルハ文意ヲ明カニ
シタルマテナリ

第二百二十三條 同一ノ訴ニ於テ起サレタル數個ノ請求ノ一個又ハ
一個ノ請求ノ一分ノミ又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テハ本訴若ク
ハ反訴ノミカ裁判ヲ爲スニ熟スル時ハ裁判所ハ終局判決ハ一分判
決ヲ以テ裁判スヘシ

然レ共裁判所ハ事件ノ情況ニ隨ヒ一分判決ヲ相當ナリトセサル時
ハ之ヲ爲サ、ル事ヲ得

(末項ハ削除)

(修正ノ理由) 第一項中ノ中ニテ其一、二ノ六字ト其裁判ヲ爲ス
ニ熟シタル云々以下ヲ削リ本文ノ如ク改メタルハ法意ヲ明瞭ニ

シタルモノナリ

第二項中「裁判所ハ事件ノ程度ニトアルヲ裁判所ハ事件ノ情況
ニト改メ一分ノトアル」ハ「」ノ一字ヲ削リ其發下トアル三字ヲ
削リ「之」ノ一字ヲ加ヘタルモ亦文意ヲ明カニシタルモノナリ
末項ヲ削除シタルハ餘計ナルモノト思考スレハナリ

第二百二十四條 各個ノ獨立ナル攻撃若クハ防禦ノ方法又ハ中間ノ
争カ裁判ヲ爲スニ熟スル時ハ中間判決ヲ以テ裁判スル事ヲ得

(修正ノ理由) 旧案第三百七十三條ノ如キハ追々修正シ來リタ
ル結果ニテ之ヲ削除セサルヲ得ヌ依テ旧第三百七十三條ニ換ヘ
右ノ一條ヲ設ケ中間判決ナルモノ、精神ヲ明カニス

第二百二十五條 請求ノ原由及ヒ數額カ争ハレタル時ハ裁判所ハ先
ツ其原由ニ付キ裁判ヲ爲ス事ヲ得

請求ノ原由ヲ相當ナリト宣言スル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決

ト看做シ其判決確定ニ至ルマテ爾後ノ手續ヲ中止ス然レ共裁判所
ハ申立ニ因リ其數額ニ付キ辯論スヘキ事ヲ命スル事ヲ得

（末項ハ削除）

（修正ノ理由） 第一項中損害云々場合ニ於テマテノ二十四字ヲ
削リタルハ之ヲ必要トセサルカ故ナリ又「理由」トアルヲ「原
由」ト改メタルハ翻譯局ト協議上ナリ

第二項中其モハニ對シテ云々申立ツル事ヲ得マテノ二十四字ヲ
削リ本文ノ如ク修正シ至ルマテノ下ハ其他ノ三字ヲ爾後ト改メ
タルハ前數條ヲ修正シ來リタル結果ニシテ且法文ヲ明カニシタ
ルモナリ

末項ヲ削除シタルハ總則中妨訴ノ抗辯ノ條項ヲ修正シタル結果
ナリ

第二百二十六條 原告又ハ被告カ口頭辯論ノ際其訴ヘタル請求權ヲ

第二百七十七條
同第二百七十八條

民訴意ノ一〇四

拋棄シ又ハ其一方ノ請求ヲ認諾スル時ハ裁判所ハ申立ニ因リ其拋
棄又ハ認諾ニ基キ判決ヲ以テ却下又ハ敗訴ノ旨渡ヲ爲スヘシ

（修正ノ理由） 本條ヲ新タニ茲ニ加ヘタルハ總則中ヲ修正シタ
ル結果ニシテ之ヲ加ヘサルヲ得サルニ至リタレハナリ

第二百二十七條 （旧第三百七十五條ヲ原文ノ儘ニ据ヘ置ク尤原文
中ニ「持立」トアルハ「獨立」ヲ誤ナリ

（旧第三百七十六條ハ削除）

（削除ノ理由） 本條ノ如キハ其必要ヲ見ス何トナレハ是等ノ手
續ハ判決書ノ調製方法中ニ自ラ明カナレハナリ

第三百七十五條

日本裁判所

獨乙訴訟法ニ於テ法律上ノ期間トアルハ左ノ數條等ナリ

第百條

第百二十五條

第二百十二條

第二百九十一條

第二百九十二條

第六百三十二條

第六百二十四條

第六百三十七條

第八百五十五條

又不可變期間トハ法律上其明文ヲ掲ケタルモノニシテ左ノ數條等
ヲ云フ

第二百十二條

第三百四條

第四百七十七條

第五百十四條

第五百四十條

第五百四十九條

裁判官ノ定ムル期間トハ第八十五條第百五條等ノ類ナリ

來十九日（土曜日）會議議案（民事訴訟法）
議案第十七號）報告委員より呈出相成候付及
御送付候也

明治廿一年五月十七日

庶務擔任報告委員

日本學術振興會

日本學術振興會

民事訴訟法草案議案第十七號

（舊第三百七十七條削除）

（削除ノ理由） 本條ノ場合ニ於テハ當度ノ請求ハ相立タス
ト言渡シ來ル事ハ一般ノ慣例ナリ若シ然ラスシテ將來訴權
ナキノ意ヲ以テ之ヲ却下スル時ハ上訴ノ理由トナルハ勿論
ナルカ故此條ヲ置クノ必要ヲ見ス

第二百二十八條 裁判所ハ申立テサル事物ヲ原告又ハ被告ニ歸與
スルノ權ナシ

裁判所ハ終局判決ヲ爲ス場合ニ於テハ訴訟費用ノ負擔ニ關スル
義務ニ限り申立アラサルモ判決スル事ヲ要ス然レトモ一分判決
ヲ爲ス場合ニ於テハ費用ノ點ニ付テノ裁判ヲ後ノ判決ニ讓ル事
ヲ得

（修正ノ理由） 第一項ノ原文中對シ其ノ三字及ヒ項ニ付キ

舊第三百
七十八
獨第二
七十九

裁判スルノ八字ヲ削リ又第二項中然レトモノ下裁、判、所、ハ、ノ
四字一分ノ下ハノ一字判決ノ下ニ於テ、ノ三字後日トアル日
ノ一字ノ末段マテ留保スノ五字ヲ削リ本文ノ如ク修正シタ
ルハ法意ヲ明瞭ニシタルモノナリ

第二百二十九條 判決ハ其判決ノ原由トナル口頭辯論ニ臨席シタ
ル判事ノミ之ヲ爲ス事ヲ得

(修正ノ理由) 原文判決トアル下ハ發下ニ付テハ六字其判
決トアル下發下ニ先チタル最終ノノ十字及ヒ參與スルノ四
字ヲ削リ本文ノ如ク修正チ加ヘタルハ其判決ヲ爲スノ基礎
トナル口頭辯論ニ立會タル判事カ言渡ヲ爲スヘキ事ヲ明カ
ニシタルモノナリ

第二百三十條 (原文ノ儘)

第二百三十一條 判決ハ判決式文ノ朗讀ニ因リ之ヲ言渡ス懈怠判

決ハ其式文ヲ作ラサル以前ト雖モ之ヲ言渡ス事ヲ得
裁判ノ理由ヲ言渡ス事ヲ至當ト認ムル時ハ判決ノ言渡ト同時ニ其
理由ヲ朗讀シ又ハ其要領ヲ口告ス

(修正ノ理由) 第一項中ニ懈怠判決ニ云々チ加ヘタルハ速ニ言
渡スヘキ事ヲ慮リタルモノナリ第二項中同時ニノ三字及ヒノ重
要ナル旨趣ヲ言渡ス十一字ヲ削リ本文ノ如ク修正チ加ヘタルハ
法理ヲ明カニシタルマテナリ

第二百三十二條 判決言渡ハ原告被告又ハ其一方ノ在廷スルト否ト
チ間ハス其效力アリ

言渡サレタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ續行シ又ハ判決ヲ他ノ方法ニ
於テ使用スル原告又ハ被告ノ權ハ此法律ニ特ニ定メタル場合ヲ除
クノ外相手方ニ其判決ヲ送達スルト否トニ關係セス

(修正ノ理由) 第一項ノ原文中ハ效力ノ三字ト末段ノ在否ニ拘

日本學術振興會

ハラ、スノ八字ヲ削リ本文ノ如ク改メタルハ法理ヲ明カニセシマ
テナリ第二項ヲ置キタルハ中間判決ヲ設ケタル結果ナリ而シテ
本文中ニ此法律ニ云々トアルハ不可變期間等ノ場合ナリ

第二百三十三條 判決ハ左ノ諸件ヲ包含ス

第一 原告被告及ヒ其法律上代人ノ氏名、身分、職業及ヒ住所ノ
表示

第二 原告被告ノ口頭演述ニ基キ且提出シタル申立ヲ表シタル事
實及ヒ争ノ諸點ノ揭示

第三 裁判ノ理由

第四 判決式文

第五 裁判所ノ名稱、裁判ニ參與シタル判事ノ官氏名

（修正ノ理由） 第一項ハ處務規定ニ屬スヘキモノナルカ故之ヲ
削ル又第二項ニ判決ニハトアル「ニ」ノ一字ハ不用ナルヲ以テ

民訴意ノ二四

之ヲ削リ其第二號ノ原文ヲ更ニ本文ノ如ク全ク改メタルハ法理ヲ
明カニシタルモノナリ第四號ノ裁判其モハノ五字ヲ削リ括弧ヲ取
リ第五號中并ニ以下ヲ削リタルハ必要ヲ見サルカ故ナリ尤第五號
中官ノ一字ヲ加ヘタルハ官名モナカルヘカラサルモノト思考スルハ
ナリ

末項ヲ削リタルモ必要ヲ見サルカ爲メナリ

第二百三十四條 （第一項ノ冒頭判決書トアル「書」ノ一字ト裁判
長其旨ヲトアル下判決書ニノ四字ヲ削リ又先任ノトアル三字ヲ官
等最モ高キノ六字ニ改ム第二項中判決書トアル「書」ノ一字ヲ削
ル）

（修正ノ理由） 本條ハ先例ニ倣ヒ文字ヲ改メタルマテナリ

第二百三十五條 裁判所ハ職權ヲ以テ判決ノ正本ヲ原告被告ニ送達
セシム

日本學術振興會

（修正ノ理由） 原文ヲ全廢シ本文ノ如キ法文ヲ設ケタルモノハ
原文ノ如ク申立ニ因リ判決ノ送達ヲ爲スモノトスル時ハ數ケ月
ヲ經又ハ數年ノ後ニ此申立ヲ爲スモ計リカタシ果シテ然ラハ其
裁判確定スルハ何レノ日ニアルカ知ルヘカラス殊ニ此訴訟法ハ
裁判所カ原被告ノ間ニ立入り送達ヲ爲スヘキ成規ナルカ故旁以
テ裁判所ハ言渡ヲ爲シタル時ハ申立ニ拘ハラヌ職權ヲ以テ送達
ヲ爲ス事ニ定メタリ

第二百三十六條 （原文第一項ヲ原ノ儘第二項ト爲シ第二項ヲ第三
項ト爲シ而シテ新タニ左ノ如ク第一項ヲ設ク）
裁判所書記ハ判決ノ原本ヲ領收シタルヨリ遅クトモ七日内ニ其正
本ヲ作ルヘシ

（修正ノ理由） 第一項ヲ新タニ差加ヘタルモノハ前條ヲ修正シ
タル結果ナリ

第二百三十七條 裁判所ハ其言渡シタル終局判決及ヒ中間判決中ニ
包含セラレタル裁判ニ纏束セラル
（修正ノ理由） 第一項中ニシテ争訟ハ全部又ハ一分ヲ完結スル
モノ、二十字ヲ削リ本文ノ如ク修正シタルハ前數條ヲ修正シタ
ル結果ナリ

第二項ハ必要ヲ見サル故之ヲ削除ス

第二百三十八條 （第一項中判決書トアル書ノ一字ヲ削リ餘ハ原文
ノ儘而シテ新タニ左ノ第二項第三項ヲ加フ

更正ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ裁判スル事ヲ得
更正ニ付テノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲ス事ヲ得ス
更正ヲ言渡ス決定ニ對シテハ即時ノ抗告ヲ爲ス事ヲ得

（修正ノ理由） 第一項中書ノ一字ヲ削リタルハ前ノ修正ニ倣ヒ
タルモノナリ又第二項第三項ハ必要ト思考シ獨逸訴訟法第二百

九十條ノ第二三項ヲ取りタリ

第二百三十九條 (第一項ハ原文ノ儘)

(第二項中判決書トアル書ノ一字ヲ削リ餘ハ原文ノ儘)

(第三項ノ末段部分トアル下ハミチ以テ目的トスノ九字ヲ削リ部
分ニ限り之ヲ爲スト改ム)

(第四項ハ削除)

(修正ノ理由) 第二項中書ノ一字ヲ削リシハ先例ニ倣ヒタリ第

三項ハ注意ヲ明カニシタルマテナリ第四項ハ口頭辯論ノ原則ニ
背クヲ以テ削除セリ

第二百四十條 判決ヲ更正シ又ハ之ヲ補充スル裁判ハ判決ノ原本及

ヒ正本ニ之ヲ加フ若シ正本ニ之ヲ加フル事ヲ得サル時ハ更正又ハ
補充ノ裁判ノ正本ヲ作り之ヲ送達スル事ヲ要ス

(修正ノ理由) 原文中其モノ、成分ニシテ之ノ十一字ヲ削リ

本文ノ如ク修正ヲ加ヘタルハ前數條ヲ修正シタル結果ニシテ且

法意ヲ明カニシタルモノナリ

(舊第三百九十一條ハ削除)

(削除ノ理由) 本條ハ專ラ判決ノ理由ハ確定セサル事ヲ示シタ
ルモノナレ供民法草案ト牴觸スル所アルヲ以テ削除ス

來ル廿五日（金曜日）會議議案（民事訴訟法
草案）按第十八號報告委員ヲ呈出相成候付候
也

明治二十一年五月廿三日

庶務擔任報告委員

民事訴訟法草案議案第十八號

第二百四十一條 口頭辯論ニ基キ爲ス裁判所ノ決定ハ之ヲ言渡ス事

ヲ要ス

第三十條、第二百三十一條ノ規定ハ裁判所ノ決定ニ又第二百三十三條、第二百三十六條及ヒ第二百三十七條ノ規定ハ裁判所ノ決定及ヒ裁判長并ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ニ之ヲ準用ス

一修正ノ理由一舊第三百九十二條中冒頭ノ口頭辯論ニ基キトアル下ヲ總テ取削シ本文ノ如ク改メタルハ前數條ヲ修正シタル結果ナリ

舊第三百九十三條 (削除)

(削除ノ理由) 本條ノ旨趣ハ前條中ニ加ヘタルヲ以テナリ

第三節 懈怠判決

第二百四十二條 (本條中闕席トアルヲ懈怠ト改ム其餘ハ原文ノ儘)

民事訴訟法草案議案第十八號

（修正ノ理由）闕席ヲ懈怠ト改メタルハ先例ニ從ヒタリ

第二百四十三條 出頭セサル一方カ原告ナル時ハ裁判所ハ懈怠判決
ヲ以テ其訴ノ却下ノ旨渡ス事ヲ要ス

（修正ノ理由）原文中其起シタル請求ヲ拋棄シタルモノト看做シ
ノ十九字ハ之ヲ置カサルモ判決ヲ以テ訴ヲ却下スル時ハ勿論其
事件ヲ再訴スルノ權ナキ故右ノ數字ハ必要ヲ見ス其他其訴ヲ却
下スル事ヲ闕席判決ヲ以テトアルヲ本文ノ如ク改メタルハ他ノ
文例ニ倣ヒタリ

第二百四十四條 出頭セサル一方カ被告ナル時ハ裁判所ハ被告カ原
告ノ事實上ノ口頭供述ヲ自認シタルモノト看做ス

前項ノ理由ニ基キ若シ原告ノ供述ニ因リ其起シタル請求カ正當ナ
ル時ハ懈怠判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言渡シ又其請求カ正當ナラサ
ル時ハ原告ノ訴ノ却下ヲ言渡ス事ヲ要ス

舊第三百九十七條 （削除）

（修正ノ理由）第一項原文中被告ヨリ書面ヲ差出シタルト否トチ
問ハスノ十九字ハ必見ナラサル故之ヲ削リ提出トアルヲ供述ト
改メタルハ旨趣ヲ明カニセシマテナリ第二項中提出カノ三字ヲ
供述ニ因リト改メ請求ノ下ヲトアルヲカト改メ正當ノ下ト爲ス
ニ足ノ五字ヲ削リ闕席ヲ懈怠ト改メ其然ラサルヲ其請求カ正當
ナラサルト改メタルハ先例ノ熟字ヲ用ヒ文意ヲ明カニシタルモ
ノナリ

（削除ノ理由）判決ノ節ニ於テ反訴ノ場合ヲ別ニ設ケサリシ故本
節ニ於テモ亦其例ニ從ヒ之ヲ削除ス

第二百四十五條 延期セラレタル口頭辯論ノ期日又ハ舉證決定ヲ發
スル前若クハ後ニ於テ口頭辯論續行ノ爲メニ定ムル期日モ亦第二
百四十二條ノ辯論期日ト看做ス

（新設ノ理由）辯論進行ノ爲メニ定ムル期日ニ懈怠シタル時ハ何レノ規定ニ依ルヘキカト云フノ疑ヲ生スヘキ故其場合ヲ明瞭ニセンカ爲メ本條ヲ設ケタリ

第二百四十六條 原告又ハ被告ニシテ出頭スルモ辯論ヲ爲サ、ルモノ又ハ辯論ヲ爲サ、ル前ニ任意ニ退廷シタルモノハ出頭セサルモノト看做サル

（修正ノ理由）原文中陳述又ハ其陳述トアルヲ總テ辯論ト改メ第百五十三條又ハ第二百五十條ノ規定ニ依リノ二十字ヲ削リ退席トアルヲ退廷ト改メ時ノ如クニ取扱ハルヘキノ十一字ト亦ノ一字ヲ削リタルハ總則ヲ修正シタル結果ニシテ且文意ヲ明カニシタルモノナリ

第二百四十七條 （本條中其ノ一字ヲ削リ其餘ハ原文ノ儘）

（削除ノ理由）其ノ一字ハ必要ナラサルノミナラス反テ疑ヲ生ス

ヘキ嫌アルヲ以テナリ

第二百四十八條 左ノ場合ニ於テハ懈怠判決ヲ爲スノ申立ヲ却下スヘシ然レ供出頭シタル原告又ハ被告ハ口頭辯論ノ延期ヲ申立ツル事ヲ得

第一 出頭シタル原告又ハ被告力裁判所ノ職權上觀察スヘキ情況ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス事能ハサル時
第二 口頭ヲ以テ爲シタル事實上ノ供述又ハ申立カ出頭セサル原告若クハ被告ニ適當ナル時ニ送達シタル書面ニ包含セラレサル時
時
辯論カ延期セラレタル時ハ出頭セサル原告又ハ被告ヲ新期日ニ呼出スヘシ

（修正ノ理由）前數條ヲ修正シ來リタル精神ニ基ク時ハ獨訴訟法

第三百條、第三百一條、第三百二條等ノ趣意ニ依ラサルヲ得ス故

日本法律協會

ニ舊案第四百條ヲ廢シ更ニ本條ヲ置キ且左ノ二條ヲ新設ス
第二百四十九條 懈怠判決ヲ爲スノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ
即時ノ抗告ヲ爲ス事ヲ得其決定力取消サレタル時ハ出頭セサリシ
原告又ハ被告ヲ新期日ニ呼出ス事ヲ要セス

第二百五十條 裁判所ハ左ノ場合ニ於テ懈怠判決ヲ爲スノ申立ニ付
テノ辯論ヲ職權ヲ以テ延期スル事ヲ得

第一 出頭セサル原告又ハ被告カ適式ニ呼出サ、リシ時

第二 出頭セサル原告又ハ被告カ天災若クハ其他避クヘカラサル
事變ニ因リ其出頭ヲ妨ケラレタル事ヲ眞實ト認メシムヘキ情況
カ知レタル時

出頭セサリシ原告又ハ被告ハ新期日ニ之ヲ呼出スヘシ

舊第四百一條 (削除)
(削除ノ理由) 本條ハ第二百四十六條及ヒ第二百二十三條、第二

百二十四條等ヲ修正シタル結果ニテ自ラ不用ナリ

第四百二條 (削除)

(削除ノ理由) 第八十六條ヲ修正シタル結果ニテ本條モ不用ナ
リ

第二百五十一條 懈怠判決ヲ受ケタル原告又ハ被告ハ此判決ニ對シ
故障ヲ申立ツルノ權アリ

故障申立ノ期間ハ十四日トス此期間ハ不可變期間ニシテ且懈怠判
決書ノ送達ヲ以テ始マル

其故障申立ハ判決ノ送達前ト雖モ之ヲ爲ス事ヲ得
送達カ外國ニ於テ爲サルヘキ時又ハ公ケノ告示ヲ以テ爲サルヘキ
時ハ裁判所ハ懈怠判決中ニ故障期間ヲ定メ又ハ口頭辯論ヲ經ヌシ
テ爲ス事ヲ得ル特別ノ決定ヲ以テ之ヲ定ムル事ヲ要ス

(修正ノ理由) 本條第一項ヲ二項ニ分チ關席トアルヲ懈怠ト改メ

不可變云々ヲ加へ又ハ壹項ヲ挿入シ其他末項中ニ又ハ云々ノ數
字ヲ加へ闕席トアルヲ懈怠トナシニ於テトアル中ニトナシヘ
キトアルヲ事ヲ得ルト改メタルハ期日期間ノ節ヲ始メ修正ヲ加
ヘ來リタル結果ナリ

第二百五十二條 故障ノ申立ハ懈怠判決ヲ爲シタル裁判所ニ書面ヲ
差出シテ之ヲ爲ス

其書面ニハ左ノ諸件ヲ掲クル事ヲ要ス

第一 故障ノ申立ヲ受クル懈怠判決ノ表示

第二 此判決ニ對シ故障ヲ申立ツル事ノ陳述

其書面ニハ本事件ニ付テノ口頭辯論ノ準備ノ爲メ必要ナル事項ヲ
モ掲クヘシ

（修正ノ理由）第一項ノ修正ハ書面ヲ差出スヘキ裁判所ヲ明カニ
シタルモノナリ第一號中闕席ヲ懈怠ト改メタルハ例ニ從フ末項

中若シ原告又ハ被告ヨリ準備書面ヲ差出サ、リシ時ハノ二十三字
及ヒ亦ノ一字ヲ削リ掲クル事ヲ要ストアルヲ掲クヘシト改メ以
下ヲ削除シタルハ其必要ヲ見サルカ爲メナリ

舊第四百五條（削除）

（削除ノ理由）本條ニ付テハ「ウイルムスキ」ヨリ之ヲ削除スヘ
キ勸告アルノミナラス之ヲ置クノ必要ヲ見サレハナリ

第二百五十三條 故障申立ノ書面力差出サレタル時ハ裁判所ハ之ヲ
相手方ニ送達シ且故障ニ付キ（以下原文ノ儘）

（修正ノ理由）前條ノ場合ヲ除クハ外ノ十字ヲ削リ本文ノ如ク修
正シタル前條ヲ削除セシ結果ナリ

日本學術振興會

來二十六日（土曜日）會議議案（民事訴訟法
草按議案第十九號）報告委員も呈出相成候付
及御送付也

明治廿一年五月廿四日

庶務擔任報告委員

日本學術振興會

日本法律家協會
編輯部

民事訴訟法草案議案第十九號

第二百五十四條 (原文ノ儘)

第二百五十五條 故障カ適法ナル時ハ訴訟ハ懈怠前ニ在リシ程度ニ復セラル

(修正ノ理由) 關、席ノ二字ハ例ニ從ヒ懈怠ニ改ムアリ、シ、前、ハトアルチ前ニ在リシト爲シタルハ句調チ改メタルマテナリ

第二百五十六條 新辯論ニ基キ爲スヘキ判決カ懈怠判決ト符合スル限リハ此判決ヲ維持スル事ヲ言渡シ其符合セサル場合ニ於テハ新判決ニ於テ懈怠判決ヲ廢止ス

(修正ノ理由) 原文中事件其モ、ハ、ニ、於、テ、ノ、八、字、及、ヒ、ニ、包、含、セ、ラ、レ、タル裁判ノ十字ヲ削リ發チ爲ニ改メ裁判トアルニケ所ヲ判決ニ改メ關、席トアルニケ所ヲ懈怠ト改メ然ラサルトアルチ符合セサルト改メタルハ先例ニ從ヒ且文意ヲ明カニセシマテナリ

舊第四百七
獨第三百六

舊第四百九
獨第三百八

日本法律家協會
編輯部

第二百五十七條 懈怠判決カ法律ニ從ヒ爲サレタル時懈怠ニ因テ生

シタル費用(以下原文ノ儘尤モ關席ハ例ニ依リ懈怠ト改ム)
(修正ノ理由) 關席ノ二字ヲ削リ冒頭ニ本文ノ如ク數字ヲ加ヘ

タルハ懈怠判決カ適法ナル時ニ限ル意味ヲ加フヘキ旨「シユル
チエンスタイン」氏ノ勸告アリシ故ニ之ヲ採用シタリ

第二百五十八條 故障ヲ申立テタル原告又ハ被告カ口頭辯論ノ期日

又ハ辯論ヲ延期セラレタル期日ニ出頭セサル時ハ第二百四十八條
第二百五十條ノ規定ニ觸レサル限りハ出頭シタル相手方ノ申立ニ

因リ故障ヲ棄却スル懈怠判決ヲ言渡ス

此懈怠判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツル事ヲ得ス

(修正ノ理由) 第一項中新期日トアル新ノ一字ヲ削リ又ハ云々

ノ數字ヲ加ヘ四百條ノ理由ノ一トアルヲ二百四十八條云々ニ改
メ故障ヲ棄却シ前裁判ヲ維持シテ新關席判決ヲ言渡ストアルヲ

本文ノ如ク改メタルハ前數條ヲ修正シタル所ニ基キタリ

第二項モ同斷

第二百五十九條 故障ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テハ控訴ノ拋棄及ヒ其
取下ニ付テノ成規ヲ準用ス

(新設ノ理由) 本條ハ是マテ修正シ來リタル結果ニテ必要ナル

條項ニ付獨訴訟法ニ倣ヒ之ヲ設ケタリ

第二百六十條 此節ノ成規ハ反訴又ハ原由ノ既ニ確定シタル請求ノ

數額ノ定テ目的物トスル訴訟手續ニ之ヲ準用ス

期日カ中間爭訟ニ付テノ辯論ノ爲メノミニ定メラレタル時ハ其懈
怠訴訟手續及ヒ懈怠判決ハ此中間爭訟ヲ完結スルニ止メラレ且此
節ノ成規ヲ準用ス

(新設ノ理由) 前條ノ理由ニ同シ

舊第四百十二條 (削除)

舊第四百十三條 同斷

舊第四百十四條 同斷

舊第四百十五條 同斷

（削除ノ理由）右ノ四條ハ總則中ニ原狀回復ノ節ヲ設ケタルヲ以テ之ヲ削ル

第四節 採證總則

舊第二百五十八條 （削除）

舊第二百五十九條 同斷

舊第二百六十條 同斷

舊第二百六十一條 （削除）

舊第二百六十二條 同斷

舊第二百六十三條 同斷

（削除ノ理由）右數條中舊第二百六十條ハ既ニ第二百十四條ニ

民訴意ノ三四

之ヲ置キ其他四ヶ條ハ民法草案第千三百十四條以下千三百二十五條マテ設定セラレシニ付キ之ヲ削除ス

民事訴訟法草案議案第十九號中追正

第二百五十七條ノ末 「被告ニ之ヲ課ス」トアルヲ「被告ニ之ヲ負
擔セシム」ト改ム

日本學術振興會

來六月一日金曜日會議案民事訴訟法草按
第二十號報告委員より呈出相成候付御送付お
よび候也

明治廿一年五月卅日

庶務擔任報告委員

日本學術振興會

日本法律協會
編輯

民事訴訟法草案議案第二十號

舊第二百六十四條 (削除)

舊第二百六十五條 (同斷)

舊第二百六十六條 (同斷)

舊第二百六十七條 (同斷)

(削除ノ理由) 右數條ヲ削リタルハ民法草案第千三百六十三條

以下千三百六十九條ニ定メアルヲ以テナリ

舊第二百六十八條 (削除)

(削除ノ理由) 本條ハ已ニ第二百十六條及ヒ第百十六條ニ規定

シタレハナリ

以下數條(探證總則ノ一節)ハ獨逸訴訟法ニ準據シ條項ノ順序
ヲ改メ且新條ヲ加ヘタル故逐條全文ヲ掲載ス

第二百六十一條 探證ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ通例トス

舊第二百
六十九
獨第三
百二十

日本法律協會
編輯

舊第二百
七十一
獨第三百
廿三

採證ハ此法律ニ定メタル場合ニ限り受訴裁判所ノ部員一名ニ命シ
又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スル事ヲ得

前項ニ從ヒ採證ヲ命スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツル事ヲ得ス
第二百六十二條 原告被告ノ申立テタル數多ノ證據中採ルヘキ程度
ハ裁判所之ヲ定ム

原告被告ノ演述ニ次キ直チニ採證ヲ爲サスシテ受訴裁判所ニ於テ
新期日ニ之ヲ爲シ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ之ヲ
爲スヘキ時ハ採證決定ニ因リ採證ヲ命スル事ヲ要ス

舊第二百
七十七
獨第三百
二十一

第二百六十三條 採證ニ付キ時間ノ不定ナル障礙アル時ハ申立ニ因
リ相當ノ期間ヲ定ムル事ヲ要ス若シ此期間ヲ徒過セシメタル時ハ
訴訟手續ヲ遲滯セシメサル時ニ限り其舉證方法ヲ用ユル事ヲ得

第二百六十四條 採證決定ニハ左ノ諸件ヲ具備ス

第一 證スヘキ係爭事實ノ表示

舊第二百
七十二
獨第三百
二十五

第二 舉證方法ノ表示殊ニ證人又ハ鑑定人ヲ訊問スヘキ時ハ其氏
名、身分、職業及ヒ住所

第三 舉證方法ヲ申出テタル原告若クハ被告ノ氏名

第二百六十五條 採證決定ノ變更ハ其決定ノ完結前ニ於テハ原告又
ハ被告ヨリ以前ノ辯論ニ基キ之ヲ申立ツル事ヲ得ス

採證決定ノ執行ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

獨第三百
二十六

第二百六十六條 採證カ受訴裁判所ノ部員ニ因リ爲サルヘキ時ハ採
證決定ヲ覆渡ス際裁判長受命判事ヲ指名シ且採證ノ期日ヲ定ム
期日カ定ノラレサル時ハ受命判事之ヲ定ム受命判事其命ヲ執行ス
ルニ差支アル時ハ裁判長ハ他ノ部員ヲ命ス

舊第二百
七十五
獨第三百
二十七

第二百六十七條 採證カ他ノ裁判所ニ於テ爲サルヘキ時ハ裁判長ハ
其囑託書ヲ發スヘシ

採證ニ關スル審問書ハ原本ニテ受託判事ヨリ受訴裁判所書記ニ之

舊第二百七十三

第二百六十八條 受命判事又ハ受託判事探證ノ期日ヲ定メタル時ハ之ヲ原告被告ニ通知スル事ヲ要ス

舊第二百七十六
獨第三百二十八

第二百六十九條 外國ニ於テ爲スヘキ探證ハ外國ノ管轄官廳又ハ其國駐劄ノ本邦ノ公使若クハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス其囑託書ニ付テハ第五百五十條第五百一一條及ヒ第五百五十三條ノ規定ヲ準用ス

獨第三百三十

第二百七十條 受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判所ニ因リ探證ヲ爲ス事ヲ適當トスル理由カ後ニ生シタル時ハ其裁判所ニ探證ヲ囑託スルノ權ヲ有ス此命令ハ原告被告ニ通知スヘシ

舊第二百七十四
獨第三百一

第二百七十一條 受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於ケル探證ニ際シ争カ生シ其争ノ完結スルニアラサレハ探證ヲ續行スル事ヲ得ス且其判事之ヲ裁判スルノ權ナキ時ハ其完結ハ受訴裁判所之ヲ爲ス

民訴意ノ三七

獨第三百一

第二百七十二條 原告被告ノ一方又ハ雙方ガ探證ノ期日ニ出頭セザル時ハ事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限りハ探證ヲ爲ス事ヲ要ス
第二百七十三條 裁判所ハ事件カ未タ判決ヲ爲スニ熟セストスル時ハ探證ノ補充ヲ決定スル事ヲ得

舊第二百八十一
獨第三百二十二
第二

原告又ハ被告ノ出頭セサルニ因リ全部又ハ一分ノ探證ヲ爲ス事ヲ得サル場合ニ於テ其追完又ハ補充ハ之カ爲メ訴訟手續カ遲滯セラレサル時又ハ舉證者カ其過愆ニアラスシテ前期日ニ出頭シ能ハサリシ事ヲ疏明スル時ニ限り判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ申立ニ因リ之ヲ命ス

獨第三百三十三

第二百七十四條 探證又ハ其續行ノ爲メ新期日ヲ定ムルノ必要アル時ハ舉證者又ハ原告被告雙方カ前期日出頭セサリシ時ト雖モ職權ヲ以テ之ヲ定ム

舊第二百七十九ノ
獨第三百

第二百七十五條 受訴裁判所ニ於テ探證ヲ爲ス時ハ其探證期日ハ同

日本學報編輯會

舊第二百八十二條
獨第三十四ノ
類

時ニ口頭辯論ヲ續行スルノ期日ナリトス
受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ採證ヲ爲スヘキ事ヲ命シタル
時ハ其採證決定中ニ同時ニ受託裁判所ニ於ケル口頭辯論續行ノ期
日ヲ定ムル事ヲ得若シ之ヲ定メサル時ハ採證ノ終結シタル後職權
ヲ以テ其期日ヲ定メ之ヲ原告被告ニ通知スヘシ

第二百七十六條 裁判所ハ相當ノ期間ヲ定メ採證ノ費用ヲ舉證者ヨ
リ豫納セシムル事ヲ得若シ其期間内ニ豫納セサル時ハ採證ヲ爲サ
ス但期間ノ滿了後ト雖モ豫納シタル時ハ訴訟手續ノ遲滯ヲ生セサ
ル場合ニ限り採證ヲ許スヘシ

（削除及ヒ修正ノ理由） 本節中舊第二百七十九條ノ第一項ハ口
頭辯論ノ原則ニ背ク旨「シユルツェンスタイン」氏ノ意見アリ
且第二百四十五條ヲ置キタル結果ニテ本條ヲ削除ス又舊第二百
十四條ノ規定中ニ包含スルモノトシテ之ヲ削リタリ其他ノ修正

民訴意ノ三八

ハ總テ獨逸訴訟法ノ精神ヲ取り法文ヲ明カニシ且手續ヲ綿密ニ
ナシタルモノナリ

來二日土曜日會議按民事訴訟法草案議按
第二十一號報告委員も呈出相成候付^及御送付
候也

明治廿一年六月一日

庶務擔任報告委員

民事訴訟法草案議案第二十一號

第五節 人證

第二百七十七條 (原文ノ儘)

第二百七十八條 公ノ吏員ハ退職シタル時ト雖モ其職務上默秘スヘキ義務ニ關スル情況ニ付テハ其本屬應又ハ其最後ノ本屬應ノ許可ヲ得タル時ニ限り之ヲ證人トシテ訊問スル事ヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得ル事ヲ要ス

其許可ハ證據ヲ述フルニ因リ國家ノ安寧ヲ害スルノ恐アル時ニ限り之ヲ拒ム事ヲ得

受訴裁判所ハ其許可ヲ受ケ且之ヲ證人ニ通知スヘシ

(新設ノ理由) 舊案第二百九十一條第一ノ法文アルノミニテハ實際上差支ヲ生スル事アルヘシ是ヲ以テ本條ヲ新タニ加ヘタリ

第二百七十九條 (第一項ハ原文ノ儘第二項ハ削除)

舊第二百八十三
獨第三百四十一

舊第二百八十四
獨第三百三十八

（削除ノ理由） 第一百五十九條ノ規定ハ原被告ノミナラス證人等

モ包含スルノ法意ナル故本條第二項ヲ必要トセス

第二百八十條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ掲グル事ヲ要ス

第一 證人及ヒ原告被告ノ表示

第二（原文ノ儘）

第三 證人ノ出頭スヘキ場所、年月日及ヒ時ヲ表示シタル期日

第四（原文ノ儘）

第五（原文ノ儘）

（末項ハ削除）

（修正ノ理由） 原文中第二ヲ削リ第一ニ原告被告ヲ加ヘ氏名身分職業及ヒ住所ヲ削リタルハ先例ニ倣ヒタリ其他ハ文意ヲ明カニセシマテナリ又末項ハ急速ヲ要スル場合ニ於テ甚タ不都合ヲ生スヘキ旨「シユルチエンスティン」氏ノ意見アリ且必要ノ規

定ニモアラサル故之ヲ削リタリ

第二百八十一條 現役ノ軍人軍屬ヲ證人トシテ呼出ニハ其直近上班

ノ指令官廳ノ長官ニ（以下原文ノ儘）

（修正ノ理由） 本條ハ第十一條及ヒ第三百三十七條等ニ類スル條

項ナルカ故先例ニ倣ヒ海陸軍ノ軍隊ニ在ル下士官及ヒ兵卒ノ數

字ヲ削リ仮リニ本文ノ如ク修正シ尙陸軍省ト協議ノ上改ムヘキ

モノ

第二百八十二條 （原文ノ第一項中ナク及ヒ其出頭セサルノ六字ヲ

チ削リ甲立ナシト雖モ決定ヲ以テ其不參ノ十五字ヲ加ヘ過料ヲ罰

金ト改メノ決定ヲ爲ストアルヲヘシト改ム）

（第二項中過料ヲ罰金ト改メ引致ヲ勾引ト改メ第三項右ヲ本條ト改

メ抗告トアル上ニ此ノ一字ヲ加ヘ猶豫ヲ停止ト改メ第四項ハ左ノ

如ク修正ス）